始

323-130 2-377

アルフレッド大王

上編

長谷川四郎
鈴木芳松 譯解

東京 建文館 藏版

大正
4. 9. 25
内交

はしがき

下に掲ぐる特長を有するが故に本叢書は、數多き類書の間に於いて、存在の價値ありと信ず。

第一卷に於いては

(一) **英文の構造** を明かに會得せしめん爲め、譯と註との外に、**構文解說**の欄を設け、諸種の活字を巧みに適用して、語句の輕重、聯絡を一目瞭然たらしめたること。

(二) **譯文** は出來得る限り英文の措辭のまゝに日本語を配し、しかも邦文の味を損はざるやう努めたれば、讀者は兩文を對照研究することによりて、**英文の區切り目を ふる力**を養ふを得て、譯解上長足の進歩をなすべきこと。

(三) **註釋** は本書程度(中學三、四年)の學生に必要と思はるゝ點には普遍的に注意を拂ひたるが、殊に、「at first とあらば後に at last の來るを豫期すべし」と**英文の照應**を敎へ、日本語にて「月……を照らす」は英語にては "The moon shines upon……" となり、彼我、**動詞の使ひ方**に相違あることを示す等、單に字句の說明に止まらず、語の用法、句の配置まで愈ろに解說し尙、類似の構造ある場所には一々(……參照)と記して、照合記憶に便じたること。

(四) **原文** としては英國の出版に係る少年叢書の中より、文體の醇正にして、敍事の趣味に豐かなるものを選みたれば之を**課外讀物**として學生に課するも至極適當なること。

（五） 本卷の主人公アルフレッド大王は、サクソン民族渇仰の中心にして、個人としては溫雅にして學を好み、王者としては英邁にして民を愛し、北狄大擧して來り侵し、四隣皆守りを失へるの時に方り孤軍敢然として强敵に抗し、英民族今日あるの基を鞏うしたる偉績は千載の下仍、我少年諸士に健全有益なる感化を與ふべきこと。

大正四年の夏

長谷川 康
鈴木芳松

大方の諸賢にして本書中に誤謬を發見されなば何卒御忠告を賜はり度く感謝の念を以って再版の際正誤可仕候。

讀者に御注意

◎本書中の人名地名の發音は英國式に則ったのである（The Century Dictionary の Proper Names 篇に含む限りは）。

▲譯文中〔 〕に入れたる部分は原文になきところを敷衍したのである。

●英文を讀み、構文解說を參考し、自分で譯を試み、然る後、本書の譯註を見るやうにせられなば學力上達に一層大なる效果があらう。

尙本書の解釋に據るも尙、不明の點あらば建文館內、鈴木に宛て御質疑あれ。

KING ALFRED

CHAPTER I.

A Da'nish Raid

デインの襲來

The sun was shining brightly on Saxon England, on a sum'mer's day more than a thousand years ago. A freeman, resting lazily after his mid-day meal, lay on the cliffs above the little vil'lage of Bosham (bos'-hăm), every now and again' casting his eye acrŏss' the still waters.

構文解說

1. **The sun...brightly** + { on.....England——處 / on.....ago——時 }
2. **A freeman lay** + { resting.....meal——時 / on.....Bosham——處 / every.....watars——動作 }

英文を釋くに方りて、その主要部分と添加部分とを識別すること肝要なり。上の表中黑活字にて

印刷せるは主要部にして、普通活字を用ゐたるは添加部なり(以下之に準ず)而して添加部の表示する要旨を右端に附記せり。尚、……の部には原文の語句を配置して見るべし。

注意:—(*a*) 2 の文に於いて *A freeman* と *lay* とは間に添加句を隔つれども相聯絡して文の骨子を成す。—(*b*) *casting* は前の lay と關係して「……を抛げながら横になつて居た」となる。

【譯】 太陽は赫々とサクスン時代の英國の上に輝いて居た、今から千年餘りも昔の或る夏の日のこと。 一人の農夫が、午餉(ひるはん)を濟ました後で悠然(のんびり)と憩(やす)みながら、横になつて居た、ボスハムといふ小さな村を見下ろす崖の上に、時折浪穏かな海上を彼方(むかう)へと眼を注ぎながら。

【註】 **Danish Raid** Denmark(丁抹)人を the Danes と云ひ、Dā′nish はその形容詞にて、「丁抹人の」といふ語、Raid は「突然の來寇」にして、今回の戰爭に於いて、Another German aerial raid「またしても獨逸人の空中(飛行船)襲來」など屢々新聞に見受けらる。 **……was shining on**——「……が——の上に輝いて居た」が原文に忠實なる譯。併し、「月が梨の花を照して居た」も矢張 The moon *was shining on* the pear-blossoms. としてよし。

Saxon England 往昔、英國は種々なる民族の來寇を受けたるが、その中の Saxon 族が全盛であつた時代の英國を指したのである。

a summer's day 's を除くも可。之を附したる形は多く美文に用ゐられ、summer と winter に限る。

……ago 「今より……以前」。 今よりの意味あるに注意。

a freeman Saxon 時代に於いては村の土地の幾分かを所有し居る農民をかく呼んだのである、小作人と區別して。

resting……meal は要するに「食休み中」の意。

lay lie「横たはる」の過去形。

every now and again every now and then といふも同じ、「時々、チヨイ々々々」の意。

casting his eye across…… 「……を彼方(むかう)の方へと眼を投げる=視線を……の彼方へと馳せながら=……の彼方を眺めながら」。

waters water を「水」といふ意味に使ふ時は決して *s* を附せず、*s* を附すれば、海、河、湖水等の意。

Sŭd′denly his gaze became fixed; idleness gave place to keen in′terest; for he saw two small ob′jects on the dis′tant horizon (hŏri′zn) which he knew to be ships.

構文解說

1. Suddenly+
   his gaze became fixed
2. **idleness gave place to keen interest**
   for

horizon

3. he saw Objects＋{ on……horizon—遠 / which……ships—*Objects* を説明す

此文は三ツ（1. 2. 3.）の獨立の文となり得べき節をまとめたるものにして、*for* はそれより上の二ツの節に表はれたる事柄の起りたる理由をそれより下の節にて説明する時に中間にありて接續の働をなす詞なり。Sudddenly は次の文の事柄の起り具合が突然なりしを示す語。

【譯】突然、彼は眼を据えた。ぼんやりして居たのが打つて代つて油斷のない身の入れ方。それもその筈、彼は、遙かの水平線上に、二ツの小さな物を見つけた、それを彼は船と見て取つたのである。

【註】**his gaze became fixed**「彼れの熟視が固定された」とは「視線が一個所に集注された」意。

idleness gave place to keen interest「ボンヤリした態度が鋭い身の入つた態度に席を譲つた」とは「ボンヤリした態度は失せて其代りに油斷のない引締つた態度が顯れた」意。例:—

Before long, steam will *give place to* electricity.（遠からず蒸汽は使はれなくつてその代りに電氣を用ゐるやうになりませう）。

for を「如何となれば」一點張りに譯すは愚、「それもその筈；ナニシロ……だから／だので……だもの」など場合に應じて譯すべし。

saw……objects which he knew to be ships 此處を正直に譯すと下の如し:—

「……物を見た (saw objects)〔それを彼れは何と思つたか〕その物を (which) 彼は見ぬいた (he knew) 船であると (to be ships)」。

What ships were they? Where were they going? Did their coming mĕan peace, or did they bring war? Such were the question (kwes′chŭn) which came into his mind, and which ~~demand′ed~~ a speedy answer, for these were troublous times, and the watcher well knew that scores of lives might depĕnd′ on his abil′ity to tell what the strānge craft were.

構文解說

Such……questions＋

{ which……mind——Questions を説明する句 (a)
and
which……answer——Questions を説明する句 (b) }

for——which …. answer の理由を下に述ぶる仲立

these……times——上の (b) の句に對する理由

the watcher……ability——上の (b) の句に對する理由

to……were——ability の説明

【譯】 そも何船であらう? 彼等はそも何處に行かうとするのであらう? 彼等の來航は平和の意味か、それとも戰を齎らしたのか? 彼の胸に起るのは此等の疑問、そして此等の疑問に對しては卽座の返答が必要である。 といふ次第は、此頃は何かと事多い時代であり、これを眺めて居た男はよく承知して居たのである、幾十百の人の生死が、此の怪しの船の正體を見極める彼れの能力次第できまるのだといふことをば。

【註】 **to bring war**「戰を持ち込んで來る」、「喧嘩を賣りに來る」。

to come into one's mind = to occur to one's mind「胸に浮ぶ、思ひ付く」。 to come into one's head をも參照。

.....demanded a speedy answer「早速の解答を要求した=直樣解釋をつければならぬ」。

troublous「動搖せる、紛擾せる」。 troublesome は「厄介な」、「五月蠅い」。

scores of..... score は「二十」を意味すれども scores of の形は「非常に多く」の意。

lives を「人命」と譯すも可、上の如く「生死」とする方分りよし。 例:—

.....**depend upon**——=.....hung on——「.....は——に依據する」、「.....は——次第だ」。

Success depends upon your diligence. (成否は汝の勤惰による)。

10.6.19

craft 單數の時も、又は、複數の時も同形にて用ひらる。

An hour passed àwāy′, and still the Saxon gazed, and the ves′sels grew stĕad′ily larger as they made straight (strāt) for the point of land upon which he was resting.

=隨つて

構文解說

An hour.....away +

and

still **the Saxon gazed** +

and

the vessels.....larger +

as.....land —— 上の事情の起つた時の船の針路

upon which.....resting —— *land* を說明す

【譯】 一時間經つた、それでもまだサクソン人は瞶めて居る、そして船はありありと段々大きくなつて來た、彼が憩んで居る一角に向つて眞直に進んで來るに隨つて。

【註】 **passed away** = elapsed「經過した」。 之を人間に用ゐて He passed away ..... とすると死ぬことになる。

steadily「着々と; ズンズンと」。

as.....「.....に伴れて」、「.....するに隨つて」。

to make *straight* **for**.....「(眞直に).....の方に進む」。例:—

We *make for* the fortress under the cover of the night. (闇に乘じて要塞を目がけて進んだ)。

Fear crept into his face as he looked, but still he waited until his doubt (dŏut) became a cēr'tainty, when, springing to his feet, he flew down the narrow, rugged (rŭg'ĕd) path which led to the group (grōōp) of huts where he lived. He soon rēached the village, which he roused with his cry, "The Nôrth'men! the Northmen are upon us!"

構文解說

he waited+until.....certainty——待つて居た期間

when——いよ々々 certainty となつたその時に

springing.....feet ——下の事柄に先つ動作

he flew.....path+

which.....huts——path を說明す

where.....lived——the group..... を說明す

He.....village,

which——village を說明せず、「その village を」の意

【譯】眺めて居る間に彼の顏には恐怖が現はれてきた。然し猶も待つて居たが疑ひが遂に事實

となるや、蹶然起ち上つて自分が住んで居る一群れの人家に到る狹い凸凹した路を飛ぶが如くに走つて下りた。間もなく村に着くと、其の村中の人を驚き起たしめた、『北人だ! 北人が襲ふて來た!』と呶鳴つて。

【註】**Fear crept into his face**.....「恐怖が彼の顏に這ひ込んだ」と云ふのは直譯で、邦語ならば「恐怖が段々氣色に表はれて來た」といふところ。

The hair began to rise upon my head as a certainty *crept over* me that I was in the presence of some thing that was not canny.—*Haggard.* '*She.*' (自分は確かに此の世のものならぬ或物の面前に居るのだなと思ふと身の毛がよだつて來た)。

to spring to one's feet「飛び立つ」。

which led to.....「(道路が).....に通じて居た」。

the village, *which*..... 此 village を一旦「村に著いた」と譯し、which にて受けたる分は更に「その村人を(=which).....」と解すべし。例:—

All *Tokyo* turned out to welcome the admiral. (東京中の人が提督を歡迎に出かけた)。

.....are upon us「我々を襲ひ討たんとす」、猛禽が上より襲ひかゝる氣持。

In a mō'ment all was confū'sion. From out the wood'en hōme'stĕads came the tĕr'rified women (wĭ'men) and children, filling the air with their cries, for in the heärts of their drĕaded fōes was no such

thing as mercy, even for help'less ones like these.

構文解說

From……homesteads ——下の事柄の出發點を示す

came……children＋

filling……cries——上の came を形容す

for ——上の泣くことの理由を下に述ぶる

in the hearts……mercy＋

even……these——無慈悲な事の度合

【譯】 忽ちにして上を下への大騒動。 木造の家々から出て來たわ、恐怖に打たれた婦(おんな)や小兒が、叫喚の聲を張りあげながら。 その筈だ、彼等の恐ろしと思ふ敵人の心の裡には、此の樣なかよはい者に對してさへ慈悲と云ふものなぞは〔露ほども〕なかつたのだもの。

【註】 **In a moment**「咄嗟の間に；忽ちにして」。

all was confusion＝all was in a state of confusion で大混亂の意。 類例：—all is silence (萬籟寂たり)；all is darkness (四邊眞つ闇)。

From out 之を先に持ち出したのは人々が家からドヤドヤ駈け出して來る有樣を眼前に浮ばせる爲めである。 普通に書けば The terrified women and children came out from the wooden homesteads となる。

homestead 家屋及び其の周圍の土地を總括したるものを云ふ。 在方で云ふ「屋敷」の意。

10.6.25

The great bell of the monastery (mŏn'-as-ter) was soon clanging loudly, sounding the alarm to all the countryside ; and the women, gathering such things as were prĕc'ious to them, fled with their little ones to take shelter behind the abbey (ab'bĭ) walls ; for, weak as it was, not being fortified, this was the only place of rĕf'ūge in the district, and the good prïest would take care of them and tell them what to do.

構文解說

weak as it was——下の this…… に附屬す

being not fortified——上の weak の理由を示す

this was……district

【譯】 既にして僧院の大鐘は高らかに鳴り渡つた、其邊一帶の地に警告の響を傳へて。 婦人達(おんな)は自分等に大切と思はれる樣なものを掻き集め、小兒を引連れて寺院の墻壁の蔭に隱れ家を求めるために逃れた。 と云ふのは、防禦の設備もなくて、脆いものではあつたけれど、此處が其の邊では唯一の避難所であつたからで、親切な坊さんは何かと彼等の世話をやいたり、あゝせい、かうせいと云つて呉れるのであつた。

【註】 **Monastery** 舊教の寺院で佛教の「檀林」と云つたやうな「修道院」。紀元六百八十一年にボスハムに建立された。

to take shelter「避難する」。

weak as it was「脆くはあつたけれど……」。例:—Young *as he was*, he had much learning. (年こそ若けれ彼には非常な學識があつた)。

to take care of「大切にする」と云ふのが本來の意であるが、それから「世話をする」「看護する」の意が出て來る。

little ones「小兒等」の意。鳥獸などに用ふる時は young ones 又は單に youngs などと云ふ。

One by one, the men who had been working in the fields came in, bringing in their hands the axes, scythes (sī′ths), and other ar′ticles they had been using, and which would serve for weapons (wĕ′pŭnz) of defence.

構文解說

One by one ——下の came の具合を說明す

who……fields——men を說明す

The men came in

bringing……articles——上の came in 當時の行裝

(which)……using——(which=articles) を *came in* 當時まで使用して居た筈

and——上の句と下の句をつなぐ

which……defence——上の articles の說明

【譯】 一人また一人と、野良に出て居た男達はやつて來た、手に手に斧や鎌やその他の道具を携へて、その道具類は、その人達が今迄使つて居たもので、そして又防禦の武器になるのであつた。

【註】 **One by one**=one after another「續々」。

came in の in は寺院の「墻壁内に」來た意。

In the fields field が複數の場合には「野原」でなく「畑」の意となる。

articles の後に *which* が省略されて居る。構文解說參照。

to serve for「……の役目をする; ……に代用される」。

With white, set faces they joined the little group (groop) in the courtyard of the monastery, and then, leaving the Abbot(ab′bŏt) and his monks to pā′cify their wives and children, they turned away to help to strength′en the defenc′ĕs.

構文解說

(お斷り:—以下所々圖表に代へて說明を試む)

they……group が主要部で、冒頭の *with……faces* は **they** の樣子を說明し、下の *in……monastery* は **group** の所在を示す。*and then* 以下は別の文

を成し、**they turned away** が主要部で、前の *leaving.....children* は *turned away* せる時の行動を示し、*to.....defences* は turned away せる目的を表はす。

【譯】 蒼ざめた顔に決意の色を見せて彼等は僧院の中庭の小さな群に加はつた。 それから、自分等の妻子を慰撫して貰ふ爲めに、僧正や寺僧連を殘して、彼等は踵を返して防禦を堅固にすることに助力しやうとて出かけていつた。

【註】 **set faces**「決意の現はれた顔」。

to leave one to...「を...後に殘して...させる」。 例:—

I *left* him *to* look after the child but he *left it to itself*. (私は子供の守りに彼をつけて置いたのに彼は子供をほうりつぱなしにしといた)。

to pacify「なだめる、すかす」。

They had no hope that they would themselves' be able to withstand' the Northmen, but a mĕs'senger had been sent to the Earldorman, who lived near Chichester, praying him to gather as many men as he could and come to their assist'ance.

構文解說

They.....hope が主要部で、*that.....Northmen* は *hope* がいかなる hope なるかを表はし、邦語に

て「.....といふ望; .....てふ希望」などいふ場合に當る。 but 以下は別の文にして **a messenger.....sent** が主要部 to.....Earldorman は sent の目的點を示す。 *who Chichester* は Earldorman を説明し、*praying* から末尾までは前の had been sent の用向を示す。

【譯】 彼等は人手を藉らずに北人に敵對し得ると云ふ望みは彼等になかつたが、チチェスターの邊りに住む縣令の許に使者を飛ばして、出來得る限り多くの人を集めて彼等を助けに來る樣にと懇願した。

【註】 **they would themselves** themselves を入れた理由は援軍の力を借りず自分等だけで防ぐと云ふ意味からである。

to be sent to「.....に送る」。 次の區別に注意。

A messenger *was sent to* the Earldorman.
A doctor *was sent for*. (醫者を呼びにやつた)。

to withstand.....「.....を防ぐ」。

Earldorman Alderman の古い綴で Shire の首領である。

to come to one's assistance「.....の援助の爲めに來る=.....を援助に來る」。

In the hope that they would be able to keep back the enemy ŭntil' help should arrive', they made rĕady for the cŏn'flict.

構文解説

文の主要部は **they made ready** *for the conflict* にして、別の *they would.....enmy* は初めの *hope*を布愆したる句なれば hopeと同格(Apposition)なりといふ。*until—arrive* は keep back する期限を示す。

【譯】 援けが來るまで敵を喰ひ止めて居られるだらうと思って彼等は戰鬪の用意を整へた。

【註】 **in the hope that**「.....する目的で; .....の見込みで。」

to keep back＝to hold back「支える; 喰ひ止める」。

to make ready for.....＝prepare for.....「.....の準備をする」。

The man who had brought the bad news had, with two companions, returned to his place on the cliff. From thence the ships, now răp'idly nearing the shore, were plainly seen.

構文解説

此文の主要部は **the man** ( ) **had** ( ) **returned** にして、上の *who.....news* は man を説明し、*with two companions* は return した時の狀態を

示し、下の *to his place* は return した目的地點、而して *on the cliff* は place の位置を示す。

次の文は、**the ships** ( ) **were plainly seen** が主要部分にして ( ) の中の *now.....shore* は ships を形容する。

【譯】 凶報を齎らした男は、二人の伴れと一緒に、此時既に崖の上の自分の位置に戻つて居つた。其處からは 今急いで岸に近づかうとして居る 船が歴然(はつきり)と見えた。

【註】 **From thence**＝from there.

nearing near を動詞に用ゐたるなり。

They were ships of war, the dreaded long-ships of the Vikings. Of great length, with narrow beam, and little depth of keel, they looked wŏn'drously light and graceful as they sped on, each rowed by thirty pairs of oars.

構文解説

1. **They.....war** が主要部分で、*the dreaded... Vikings* は前の ships を繰り返して説明したるもの。

2. *of strength* と *with beam* と *little.....keel* とは皆 **they** (＝ships) **looked.....graceful** といふ主要部分中の ships の狀態を説明したる句。*as...*

...*on* は前の looked に屬し、look した時の船の進み方の迅きを表はし、*each* 以下は船の進行の方法を示して居る。

【譯】 其等は軍船であつた、ヴァイキングのあの恐ろしい長船であつた。 幅が狹く、非常に長い、吃水の極めて淺い船で、各々三十對の撓に漕がれて疾走する樣子は怪しいほど輕快で品のいいものであつた。

【註】 **long-ships** 長い幅の狹い船で Northmen の使用したものである。

Viking vi'king と發音する。 Northmen に對して與へられた名であるが屢々海賊の意味に誤まられた。*vic* はデーン語で「灣」を意味する。 デーン人は頻りに海岸をうろついたところから斯の名を得たのであらう。

of great length の前に They were を補ひ、**keel** の次に and を入れて解す可し。

The sun fell upon the dragon's heads of green, and gold, and crimson (krim'zn), which formed the stems of the vessels; upon the crimson and yellow shields which hung along the curves of their sides; upon the forked, black and gold flags which floated in their sterns; and upon the mail

and armour of the warriors who filled their decks.

構文解說

The sun fell +

- upon.....crimson + which[1].....vessels
- upon.....shield + which[2].....sides
- upon.....flags + which[3].....sterns
- and
- upon.....warriors + who.....decks

主要部の **fell** と云ふ動作の加はる所四ツを **upon** ..... と云ふ部分にて表はし、*which*[1] は前の句中の the dragon's heads を代表し、*which*[2] は shield を、*which*[3] は flags を、而して *who* は warrior を受ける。

【譯】 日は照り輝いた、船首を形くつて居る綠色、黃金、さては眞紅の龍頭の上に、船側(ふなはた)のふくらみに沿ふて懸け連ねた紅や黃の楯の上に、船尾に翻る黑地に金の紋樣ある裂尾の旗の上に、さてはまた、甲板狹しと乘込んだ武夫の鎧の上に。

【註】 **the dragon's heads**( ) **which formed the stems of the vessels.** 「船の舳を形成したる龍の頭」とは船首を龍頭に造り成せしなり。 全體船の尖頭には figurehead と云ひて其船の名に因みたる人の像などを裝飾的に彫りつくる習あり。

sides 船ならば「船側」。人ならば(横腹)。
forked.....「フォークの形をなしたる; 股に裂けたる」。
black and gold「黑地に金の(模様ある)」。

Tall and hardy men they were, with long fair hair and handsome faces, and they chanted their war-songs as their ships sped along.

構文解說

Tall and hardy men they were
(=They were tall and hardy men)+
with.....faces——they の容貌を表明す
and——上の主要部と下の主要部との接續
they chanted their war-songs
as.....along——chant した時の狀態を示す

【譯】 彼等は長い美しい頭髮と立派な容貌を具へた、丈高い屈強なものどもで、船が疾走するに伴れて軍歌を歌つた。

【註】 **Hardy**「頑丈な」、「風雨寒暑に耐える力ある」、日本人は歐米人よりも hardy なり。
to chant「歌ふ」。

To the stranger, they would have made a beautiful picture, but to the Saxons watching upon the cliff, the sight was one

which filled them with dread (drĕd). For they knew that these northern warriors had come to plunder, to burn, and to kill.

構文解說

1. To the strangers
they would have made.....**pictures,**
but
to the Saxons+watching upon the cliffs
the sight was one+which.....dreads

これは but を境にして上下二節に分ち得る文にして、冒頭の **To the strangers** は *If* the strangers *had seen them* (事情を知らぬ人達がその船を見たものと假定すれば)といふ條件を示し、下の *they*..... *pictures* は此條件に應する形を具へたり。

to the Saxons..... は *when* the Saxons..... *saw* them (.....サクソン人がその船を見た時に)と事實を示し、下の **the sight was one**..... は矢張事實を表はせり。

---

2. For—前の末尾の *the sight*..... に對してその理由を以下に述ぶるなり。主要部は **they knew** にして that 以下は knew (=知つて居た)事柄なり。而して had come *to* plunder, *to* burn and *to* kill の to..... は皆、前の come へかゝり、had come (來た) 目的を示す。

【譯】〔知らぬが佛の〕他國の者には此船々は美しい繪とも見えたであらうが、懸崖の上で之を視まもつて居るサクソン人にとつては恐怖身に透徹る光景であつた。 さもあらう、此等北方の軍兵共は奪掠と燒打と殺人とを目的に攻めて來たのであるから。

【註】 **the stranger**「土地を知らぬ人、旅の人」。 **would have made a beautiful picture**「美しい繪畫を作つたであらう」は「美しい繪畫となつて眼に映つたであらう」の意で英語によくある expression である。例:—

She will *make* a good wife.「彼の女は良い細君になるだらう(=細君にしたら良いだらう)。」

As the vessels neared the mouth of the little creek round which the village was grouped, the three watchers rose and quickly made their way to the monastery where the great bell was still toiling.

構文解說

主要部分は **the three watchers.....to the monastery** で、*as.....creek* は主要部中の made their way といふ行動の行はれた時を示し、*round which..... grouped* は creek と村落との位置の關係を表はして居る。末尾の *where* 以下は monastery に於ける模樣を示して居る。

【譯】 それを圍つてあなたこなたに村落を散見する小さな入江の口に件の船々が近づいて來た時に、三人の番人は立上がり、お寺を指して道を急いだ、其お寺には大鐘がなほ殷々と鳴り渡つて居たのである。

【註】 **made their way to.....**「(.....)を指して進んだ」。 前に出たる made for..... を參照せよ。

Scarcely had they arrived, when there was a loud knocking at the gate and a voice cried, "Open quickly, Father, for the Danes are at my heels. It is I, Osric, your messenger."

構文解說

主要部は **Scarcely had they arrived** にして、文を They had scarcely arrived とするも可。而して scarcely..... は「殆んど.....せぬ」意なる故、上文は「彼等は殆んど到着しなかつた=充分到着したとは云へなかつた=到着したかしないかのキワドイ時であつた」の意なり。 **when.....gate** は到着したかしない、「その時に門を.....」と前の「到着する」と「門を叩く」とが殆んど同時であつた關係を示す。

【譯】 彼等がやつと寺へ着いたばかりのところ

門を烈しく敲く音がして叫聲。『お師匠樣、速くお開け下さいまし。デーン人がもうスグと參りまする。私で御座います、貴僧のお使者に立つたオスリツクで御座います』。

【註】 **Scarcely.....when**＝no sooner than で「.....するかしない中に」しかし「.....はしてしまつた」意。

a voice cried これも邦語には見られぬ expression だが「叫聲がした」位の譯でよからう。

Father 此處では「お師匠樣」位の意。

at one's heels「スグその人の後方に踵いて」。

又 with a great army *at his heels*..... の例では「從へて、率ゐて」の意。

The door was at once unbarred (un-bärd′) and as quickly closed, whilst all pressed round the new-comer, asking, "Has the levy (lĕv′-i) arrived?"

【譯】 扉は開けられるが早いか再びピタリと閉ぢられた。 其の間に居合はせた人々は今着いた男の周りに詰めかけて來た『援けは來たか』と問ひながら。

【註】 **to unbar**「閂を拔く」。

as quickly「開けた時と同じ速さで」。

pressed round「四方からヒシヒシと押寄せた」。

new-comer Osric を指す。

levy デーン人を擊退すべく徵募された人々を云ふ。

The man made no answer, but pushed his way towards the Abbot, a tall monk with a golden cross upon his breast, whose face was calm (käm) in the midst of all the turmoil (tûr′moil).

【譯】 其の男は何とも答へず、人々を押し退けて僧正の方へと進んで行つた。 僧正と云ふのは胸間に金色の十字架を懸けた丈の高い坊さんで、これ程の騷動のたゞ中にも神色自若として居た。

【註】 **to push one's way toward**..... 「.....の方へと群衆の中を掻分けて進む」意。 類例として to *elbow* one's way がある。 これは「肱で人を押退けて行く」こと。 尙 23 頁 to make one's way を參照せよ。

whose face was calm *calm* は「ピクともせず沈着いてゐる」で「神色自若」がよく當る。

in the midst of.....「.....の眞最中に」。

turmoil「騷亂；混雜」。

"Well, Osric?" he said.

"The Earldorman fears he will not be able to bring aid in time, and advises you to take to the woods," whispered the messenger.

【譯】『おゝオスリツク、如何いたした?』彼が言つた。『縣令樣には間に合ふ樣に援けを寄越すことは難かしからうと御掛念なされ、あなた方に森に身を忍ばせられる樣にとの御忠言で御座りまする』、使者はかう囁いた。

【註】 **to be in time** (間に合ふ)。反對は to be *too late* (間に合はぬ)。

to take to=to *betake oneself to*..... 「身を..... に寄せる」。 to take to the road と云へば「剽盜をする」の意。

fear は「心配する、恐れる」の意であるが此處では左程強い意味ではない。 猶 I hope..... の場合に hope は「希望する」と云ふ樣な强い意味を表はさないと同一である。

{ *I fear* I shall be late. / *I am afraid* I shall be late. } 遲くなりやしないかしら

At once the Abbot gathered his monks around him and told them the message. Then, rousing the people, he led them to the gate, which opened towards the forest land, and bade (bǎd) them make their way with all speed to Chichester.

【譯】 早速僧正は寺僧達を己が身邊に集めて使の口上を話した。 それから人々を勵まして森地

へ出る門の處へ伴れて行つて、サア、一目散にチチェスターを指して落ちて行け、と申渡した。

【註】 **to rouse**「目を覺まさせる」「喚起す」の意味から「勵ます」「皷舞する」の意味になる。

the gate which opened.....「.....の方に當つて開いて居る」、「そこから森へ通じて居る」。

bade に對し make の前に to を附せざることに注意。

with all speed=as quickly as possible「出來る限り速く」。

The monks were very unwilling to leave their chief, and asked what would become of the holy vessels if they did not stop to protect them.

【譯】 寺僧達は自分等の師の許を離れることは甚だ懌ばなかつた。 而して若しも自分達が踏留まつて保護しない日には彼の神聖な銀の杯は如何なることか、とたづねた。

【註】 **what would become of**=what would happen to「これから先如何なることやら.....」。

holy vessels「供養の際に用ゐる銀製の杯」。

if.....did not stop to protect「踏み止まつて護らなければ」である。「保護することを止めなかつたなら.....」と誤譯しない樣に注意。

"Obey! as your vows bid you," said the Abbot. "I and Osric will take care of the holy things."

【譯】『師の言葉だぞ、誓の言葉を忘れはせまい。 俺とオスリックで神の調度は粗略にはせぬぞよ』と僧正が言つた。

【註】 **Obey**「從へ」なれど、日本語として妙ならぬ故上の如くせり。

as your vows bid you の次に to obey を補へ。弟子入りの時「師匠の言ふことは何でもきゝます」と誓を立てた其の言葉通りに從への意。

holy things は silver vessels を指す。

So they went, weeping, and were soon lost in the woods; for there was little cleared land round the village, and the trees came almost to the monastery wall.

【譯】 そこで彼等は涙ながらに其場を立退き、見る間に森の中に姿は見えずなつた、ナニシロ村落の周圍には樹木の無い所はなく、殆ど僧院の壁の處まで繁茂して居たのだから。

【註】 **lost in the woods**「彼等の姿が森の中に隱れてしまつた」で此處では「森の中で道に迷ふた」の意味ではない。 例:—

The aeroplane was soon *lost* in the fog. (飛行機は程なく霧の中へ沒した)。

cleared「樹木を伐り拂つて開墾地としてある」。

When the last monk had gone, the gate was once more closed and barred. The sacristan, who still remained at his post, Osric, and Abbot were now the only ones left. Having made the gate secure, the two latter walked quickly towards the church. On reaching the door, the Abbot bade Osric defend the gate, whilst he entered the sacred building.

構文解說

1. When.....gone——下の潤のなされし時を示す

the gate.....barred

The sacristan who.....post
Osric
and } **were.....left**
the Abbot.

---

2. Having.....secure—— 下の文に先つ行動

the two latter.....church

---

3. On reaching the door——下の文と同時の潤

the Abbot.....gate＋whilst.....

1. に於ける The sacristan, Osric, the Abbot の三人が were left の主格たるに注意せよ。

【譯】 最後の寺僧が行つて了ふと門は再び鎖された。 後に殘つたものは役目大切(たいじ)と踏止まつた小僧とオスリツクと僧正の三人だけ。 門の締りをよくしてオスリツクと僧正の二人は會堂の方へ足早やに歩いて行つた。 戸口に着くと僧正はオスリツクに命じて門を防がせ、自分は聖堂に這入つた。

【註】 **remained at his post**「我任を棄てずに其地位のまゝに控えて居た」。 例:—

He died bravely *at this post*. (彼は職に殉じた)。

Sacristan 當時聖盃や其他儀式用の種々の器具を保管する役の「小僧」。

to make the gate secure「門を安固にする」。 即ち「締りをよくする」。

On reaching＝on his arrival at「.....に着いたところで」。

Even as the Saxon warrior ran to his place, hoarse (hōrs) yells burst from the Danish throats, and axe-blow began to fall upon the gate; but it was strongly made

and bound with iron in squares, so that the axes of their foes could not bite deeply into it.

【譯】 サクソンの勇士が自分の位置に走つて行くと、デーン人の喉頭から嗄れた叫聲が迸り出て門に斧を打ち下ろし始めた。 然し門は頑丈に出來てゐて、鐵の筋金が碁盤の目に入いつて居たから敵の斧と雖もそれに深く喰込むことはできなかつた。

【註】 **Even as**＝just as「丁度其の時」。

hoarse「しはがれた」。

to burst from.....「.....から迸出する」。

to bite deeply into「深く喰ひ入る」。

With his own axe ready Osric stood prepared to sell his life dearly.

【譯】 自分にも斧を用意して、オスリツクは力の限り戰はうと身構へして居た。

【註】 **to sell one's life dearly**「高値に我が生命を賣る」と云ふことは即ち「安つぽくは死なぬ、奮鬪努力して敵にも多大の損傷を與へて然る後死ぬ」の意。

The bell had ceased ringing now, and the Danes howled the louder. A few moments more and the Abbot appeared, followed by the sacristan, who bore on his

shoulders an oaken chest in which all the precious possessions of the monks had been hastily placed.

【譯】 今は鐘も鳴りを止めた。そしてデーン人は益烈しく怒號する。 五六分經つて僧正が現はれた、これに次いで小僧が、寺僧達の貴重品を殘らず大急ぎで詰め込むだ樫の箱を肩に擔って現れた。

【註】 **ceased ringing**「鳴る音を止めた＝もう鳴つて居なかつた」。

to howl「吼ゆる、荒々しく叫ぶ」。

A few moments more and＝after a few moments 尙次の例を見よ。

One word more *and* you shall be granted（もう一言云へば許してやらう）。

"Come, Osric," said the Abbot with a smile on his pale face, and he led the way into the inner court. Here was the well from which they supplied the monastery with water.

【譯】『さあ參れ、オスリツク！』と僧正は青ざめた顔に笑を浮べて言つた。 そして彼を中庭へと導いた。 此處には僧院に水を供給する井戸があつた。

【註】 **to lead the way**「導く、案内する」。

to supply——with.....「——に.....を供給する」。

Without a word the sacristan heaved the heavy chest from his shoulders into the open mouth of the well, and with a splash and gurgle it sank into the bottom.

"That is safe," said the Abbot; "now for ourselves."

【譯】 小僧は一言も言はず、肩から重い箱を、開いてゐる井戸の口へ投げ込んだ、ザブーン！ブク、ブクーッと箱は底に沈んだ。

『品物はこれで安全、今度は吾等銘々の身の上ぢや』と、僧正が云つた。

【註】 **Without a word**＝without *uttering* a word「無言で」。

to heave「擡げる、投げる（重いものを）」。 參考：—

to heave a sigh「嘆聲を洩らす」。

to heave in sight「現はれる、見える」。

with a splash and gurgle splash は水の跳ねかかる音、gurgle は物が沈み行く時立つ泡の音。

The axes of their foes still thundered on the gate, which threatened (thrĕt'nd) every moment to give way.

【譯】 敵の斧は依然として雷の樣に門を擊つて門は今にも破れんばかり。

【註】 **thundered on the gate**＝fell upon the gate like thunder「雷の様な響がして門に打下ろされた」。

to threaten every moment to「今にも……しさうに見える」。「今にも降り出しそうな天氣だ」を It *threatens* to rain と云ふ。

to give way＝fail to resist, to break down「支へ切れぬ、破れる」。

Indeed, as the three Saxons repassed it, and once more entered the sā′crĕd building, it fell with a crash, and with loud yells of trī′ŭmph the Danes poured (pōrd) into the courtyard sûrround′ing the church.

【譯】 如何にも、三人のサクソン人が其處を再び通つて聖堂に這入る途端に、門はミリミリと倒れ、勝鬨の聲もろともデーン人が雪崩(なだれ)の如く中庭に押寄せて會堂を取圍んだ。

【註】 **Indeed** 前節で「門が今にも破れんばかりだと云つたのを此處で「それどころぢやない全く此の通りだ」と云ふ意。

loud yells of triumph「天地も破れんばかりの勝鬨の聲」。

to pour into「ドヤドヤと水の流れの如く這入る」。

"Come quick!" said the Abbot, and he

ran towards the great hall with speed, making for the furthest corner. There he pressed a projection on one of the large stones, and this seeming part of the solid mā′sonry slowly rĕvŏlved′ and dĭscŏv′ered a cavity (kăv′-ĭty) large enough for a man to enter, with a flight of steps leading downwards.

【譯】『速く來い!』と僧正が言つた。そして本堂の方へとヒタ走りに走つた、その一番彼方の角を目がけて。其處で彼は大きな石の上の凸出部を押すと、此の硬質の石造物と思はれる部分は徐ろに廻轉して、下の方へと通ずる階段があつて、十分に一人位は這入れる程の窟を現はした。

【註】 **this seeming part of**……「……らしく見える此の部分」。

to revolve「廻轉する」、參考:—「廻轉式拳銃」を "a revolver" と云ふ。

discovered 此處では「見出した」でなく「示した、表はした」の意に取る。

cavity「穴、凹み」。cave と關聯して記憶するも可。

a flight of steps ズーツと一聯になつて居る階段を *a flight of*…… といふ。「そこへ行くには階子段が二ツある」は You must go up two *flights* of stairs to get there.

"Go first!" commanded the priest, and the sacristan entered, being quickly followed by Osric.

【譯】『先に這入れ!』と僧正が命令した。そして小僧は這入つた。續いてオスリツクが急いで這入つた。

【註】 **"Go first"**「先に行け」。尙吾々の屢々用ふる「何卒お先へ」は "Please go on first." 又は "After you."

Even as the Abbot placed his foot on the top step, a loud shout told them that the Danes had seen their escape. Stepping downwards, the Prior, by means of a ring of iron which was embedded in it, drew (drōō) the stone back into its place, and slipping back a large bolt he exclaimed, "Now we are safe!"

【譯】僧正が最初の一段に足を掛けた刹那に起つた大きな叫聲に、僧正達はこりや逃げる處を見付られたと悟つた。僧正は〔二,足三足〕下へ降りて〔仰向いて〕穴の口の石に埋めて置いた鐵の環を引っ張ってその石を元の位置に引き戻し、大きな閂を挿込んで『さあ我々の身は安全だ』と叫んだ。

【註】 **to place one's foot on**「脚を置く、掛ける」。

to *set* one's foot on land は(上陸する)。

a loud shout told them……「大きな叫聲が彼等に……を語つた」「其の叫聲を聞いて彼等は……と知つた」。

by means of「……を使つて、……の力を借りて」。本文には「……を引っ張って」としたり。

"Yes, but they will burn the monastery," said Osric gloomily.

"Do not trouble, my son," was the reply. "There is plenty of wood in the forest, and many willing hands to hew and shape it. Our stone walls they cannot burn."

【譯】『御意に御座りまする。然し彼奴等は僧院を燒拂ふことで御座りませう』と沈んだ調子でオスリツクが言つた。

『これ、案ずることはないぞ。材木は森に山程あるし、それを喜んで伐り倒して削つて吳れる人も澤山あるわ。吾々の石墻は彼奴等と雖もえう燒くまい』との僧正の答。

【註】 **"Do not trouble"** は "Do not trouble your mind" の意。

many willing hands willing は「喜んで何事でもする」の意。hands は「手」であるが此處では寧ろ「人々」の意である。斯樣に人體の一部分を以て人間全體を云表はすことが屢ある。

to hew「(斧などで)伐る」こと。

to shape 伐つた木を削つて夫々用途に應ずる樣に「形を付ける」。

The three were in complete darkness until the Abbot produced a tinder-box, and aided by a flint and steel they soon were able to light a couple (kŭp'l) of torches which were evidently placed in rĕad'iness for such a răp'id flight. The priest leading the way, they procēed'ĕd along the sub'ways, from the roof of which drops of water occā'sionally fell upon them.

【譯】 三人は暫らく眞暗闇の中に居つたが、其の中に僧正は火打箱を取出し、燧石と鋼鐵(かなぐ)の力を借りて、此の樣に急いで逃ける時の爲めに用意して置いた二本の炬火を灯すことができた。 僧正が先頭に立つて、彼等は地下道を辿つて進んだ。地下道の屋根から時々雫が垂れた。

【註】 **complete darkness**「全く暗闇」。
tinder-box 燧石と鋼鐵とを入れた小さな金屬製の箱。現今のマツチの前身。

For some time they held on their way, keeping up a steady pace, until the passage began to ascend, at first gently, and then more steeply.

【譯】 暫らくの間彼等は歩調をゆるめず歩を續けて行く中に、道は上りとなり、初めは緩やかに、終りは段々急になつて來た。

【註】 **For some time**「暫らくの間」。
to hold on=to continue「繼續する」、
to keep up a steady pace「たゆみなく歩む」。

At last they behĕld' in the distance a faint glĭm'mer of light, which grew brighter as they neared it. Here was a pile of stones almost covering the mouth of the subway, and these being removed, the three clambered out into the daylight.

【譯】 遂に彼等は、遠く隔たつた所に、かすかな光線の閃めきを見た。 それは彼等が近付くに隨つて段々と明らかになつて來た。 此處には殆んど、地下道の口を塞ぐ程に石が幾つも重ねてあつたが、此等の石を取除けて、三人の者は攀上つて日光の射す所へ出た。

【註】 **in the distance**「遥方に」。
to clamber out「苦心して攀ぢ上つて外へ出る」。
尙 clamber は次の如くにも用ひられる。例:—
The narrow street that *clambered* toward the mill. (水車の方へと上つて行く狹い通り)。

On looking about them, Osric and the sexton were surprised to find themselves in a coppice (kōp'is) on the top of the cliffs. Often they had passed the place without noting the hidden passage. But the Abbot checked their words of wonder by pointing to the scene (sēn) below.

【譯】 オスリツクと小僧は四邊(あたり)を見廻はすと、自分等は崖の頂上の灌木の藪に居るので喫驚(びつくり)した。 彼等はこれ迄度々此處を通つたくせに此の隱れた路に氣が着かなかつたのである。 然し僧正は彼等の口から出掛つた惟しみの言葉を遮つて下の方の光景を指した。

【註】 **coppice**「灌木の藪」。

They had passed the place *without noting*.....= they had passed the place *and yet did not note*.....

to check「抑えつける、堰き止める」で二人の者が「これは不思議だ」とでも言はうとしたところを僧正が「あれ彼處を見よ」と海の方を指したのでそれ切りになつて了つたと云ふ意味である。

From the village and the monastery smoke was arising, and they could see the Northmen preparing to return to their ships. But it was not this which caused

the priest to remain like a statue with his arm outstretched. His gaze was fixed on a group of Danes who were dragging a cart to the Abbey gate, whilst others were engaged in taking a heavy object towards it.

【譯】 村の人家や僧院から煙が立ち上つて居た。 そして北人共が船に歸る準備をして居るのも見えた。 然し僧正が指さしたまゝに腕を伸ばして彫像の樣に突立つて居たのは、恁麼(こんな)有樣を見たが爲めではない。 彼の眼は、或は車を引いて僧院の門に到り、或は重い物を門の方へと運んで居るデーン人の一群を瞶めて居たのである。

【註】 **was arising**＝was *rising*. arise は古文體。

But it was not this which の this は「村や僧院から煙があがつてゐることや、デーン人が船に歸らうとしてゐること」を指す。

to remain like a statue「彫像の樣に突立つた儘動かぬ」の意。

to be engaged in.....「.....に從事して居る」。

It needed not a second look to tell them that it was the great bell which their foes were carrying off—the bell that had been such a labour of love to the makers. Men had willingly cast their helms and harness,

and women their silver and gold into the melting pot, so that it might be forged and wrought by skilful workmen. During many a stormy night its booming had warned mariners from a rocky shore, and now it was being carried away to be once more made into axe-heads and coats of mail.

【譯】 敵が運び去らうとして居るのは彼の大鐘であることは一目見て分つた——人々があんなにも眞心罩めて造り上げた彼の大鐘であることは。巧妙な金工の手によつて鐘が首尾よく鑄造されるやうにと念じて男は鎧兜を、女は金銀を何れも快く熔壺(るつぼ)の中へ投げ込んだのである。 暴風(あらし)吹く幾夜を響き渡る其の鐘の音は、船人に警告を與へて岩礁多い沿岸から避けしめたのである。 しかも今や其の鐘は奪ひ去られて復も斧となり鎧とならうとするのである。

【註】 **It needed not a second look**「再び見直す必要はなかつた、一目見て分かつた」。

such a labour of love to the makers「拵らへた人々に取つてかほど迄に愛の工作であつた」即ち「これを造り上げる爲に喜んで骨を折つた」の意。

helms=*helmets*. helm をかく用ふるは擬古文。

harness「鎧」。

so that it might be forged and wrought……

「鐘が鍛へられ細工される爲めに」これを上の如く意譯したる方よく原文の味を寫す。

many a stormy night=many stormy nights.

to warn——from=to warn——*not to come* near a rocky shore「岩礁の多い岸に近付かぬ樣に警告する」。

"Holy Mother!" cried the Abbot, "I would give my life to save it."

But his cry was of no avail, and quickly the Danes hoisted it on to the cart and so to the harbour. From the cliffs the three watched them rig up a crane and swing the bell on the deck of one of their vessels.

【譯】『聖母よ！ 私の命に代へてもあの鐘を救ひたまへ』僧正は叫んだ。

けれども彼の叫びは何の役にも立たず、素早やくデーン人は鐘を車に乘せて港へと運んだ。 三人は崖の上から、デーン人が起重機に結ひ付けて鐘を其の船の一つの甲板へ振り上げるのを見た。

【註】 **Holy Mother**「聖母マリヤ」の事。 羅馬舊教を奉じて居た此等の寺僧達は其の助力を要する時にかう叫んだのである。

would give one's life to ——「——する爲めには命も惜しまぬ、生命を捨てゝもそうしたい」。

to be of no avail「効能がない」。

to hoist「揚げる」。

and so to は and so *they carried it* to the harbour と補つて見れば分る。

to rig up a crane「起重機を用意する」。序乍ら to rig *the market* と云へば「惡戯して市場の相場を上げ下げする」の意。

The Danes went aboard (à-bōrd′), the sails were hoisted, and the two long-ships put out to sea. For some time the Abbot watched them as if in a dream. Then, lifting up his face, he called down the curse of heaven upon the spoilers. Even as he spoke a wonderful thing happened.

【譯】 デーン人は船に乘り込んだ。 帆は上げられた。 而して二艘の長船は海に出た。 暫らくの間僧正は恰も夢の中のやうに彼等を見まもつてゐた。 軈て彼は面をあげて盜賊の上に天の呪咀を呼び下ろした。 彼が口を開くと見る間に不思議な事が起つた。

【註】 **to go aboard**「乘船する」。

to put out to sea「海へ乘出る」。

spoiler = thief, robber.

The ship in which the bell was placed lurched (lûrcht) heavily to one side. Quickly she righted herself, but only to heel

down to the other. The sun glittered on the sides of the bell as it rolled across the deck, breaking the vessel as if it were matchwood. A great wave coming on the instant, the vessel sank like a stone, and the cries of drowning men came faintly over the waters.

構文解說

1. Quickly **she righted herself**
2. *and*
3. **she did** (= righted herself)
4. only to.....other——三行の動作によりて生じたる結果

上の三行目は原文に省略されあるものなり。末行の *only to.....* の to は目的を示さず、結果を示すことに注意すべし。

---

1. breaking the vessel.
2. as *it* (= the bell) *would break the vessel.*
3. if it (= the vessel) were matchwood.

上文の如く補ひて as if の構文の由來する所を學ぶべし、此補ひたる文を譯せば下の如し:—

3. 若しその船がマツチの木であつたなら
2. 鐘がその船を割り碎いたであらうがそんな具合に
1. その船を〔バラ々々〕に碎いて

【譯】 鐘を載せた船は重さうに一方に傾むいた。 と見る間に眞直に起きかへつた、がその甲斐もなく今度は別な方へ傾いた。 太陽が鐘の腹にギラ々々と反射した、その鐘が、船をば宛然マツチの木でゞもあるやうにバラ々々に壓し碎きながら、甲板を端から端までゴロ々々轉がつたその折に。 してその途端に打って來た大浪に船は石の如くに沈んだ。 そして溺れ死ぬ人々の叫聲が幽かに海上に聞えて來た。

【註】 **to lurch**=to roll on one side「片側に傾く」。
to right「眞直に起す」。
to heel down=to roll over「傾く」。
A great wave coming on the instant the vessel= A great wave *came* on at that moment *and* the vessel.

"Little have the heathen (hē'thn) gained at Bosham," cried the Abbot; and then more solemnly (sol'ĕmly), he added, "It is the judgment of God."

【譯】『異端の徒はボスハムに來つて何の獲る物もなかつたわい』と僧正は叫んだ。 そして更に莊嚴な調子で『これぞ神の御裁判(さばき)である』。

【註】 **Heathen** 聖書中には「猶太教徒以外の者」の謂であるが今では「猶太教基督教回々教以外の者」を云ふ。
to gain little「殆んど得るものがない」。

CHAPTER II.

Three Invasions of Our Country

第二章 我國へ三度の來寇

It seems strange to us, who live more than a thousand years afterwards, that in our own country, soldiers could land from ships of war, kill the people, steal all that was worth taking, burn that was left, and sail away without interruption, leaving great desolation behind them.

desolate

構文解說

主格{ It=**that**(...) **soldiers**...**land**..., **kill**..., **steal, burn**....., and **sail** away (.....)

賓辭—**seems** strange to us (.....)

凡そ如何なる文 (Sentence) にありても、その敍事の主題たる部分あり、之を主格(Subject)(サブジェクト) と云ふ。又、その主格は「かく々々である」とか、「しか々々せり」などと其主格の狀態や行動を述ぶる部分あり、之を賓辭(Predicate)(プレディケイト)と云ふ。

さて、上文の構造は that より sail away までが

主格にして、seems strange to us が賓辭なり。然らば

That soldiers.....and sail away (.....) seems strange to us.

といふ配置となり、冒頭の It は無用なるが如く思はれむ。然るに英文にては、頭大尾小は太だ厭ふ形にして That より末尾(.....)まで五行に渉る長き主格を冒頭に出し、seems to us (.....) の如き短き賓辭をもつて文を結ぶは避くべき構造とせられ、かゝる場合には冒頭に It を措きて that..... の主格を代表せしめ、上の如く字句を配置するを常とするなり。而して、之を邦語に譯するに際しても that..... の部分を先に譯して「.....ことは」と長く述べし後、seems to us「吾々には奇態に思はれる」とするは巧ならず、本書譯文の如くするをよしとす。

(who live.....) の部分は *us* を説明する句。

(in our own country) は下の出來事の行はれた場所を示し。

(without interruption) は without *being interrupted*「妨げられずに」=no one interrupting them「何人も彼等を妨げずに」の意。

(leaving.....them) は sail away せし後の狀況を述べたるなり。

【譯】 千年以上も經つた今日の吾々〔英國の〕住

民にとつては奇態に思はれる、現在此國に於いて(敵の)軍兵が軍船から上陸して、人民を殺し、取り甲斐のある物は何もかも掠め奪つた後へは火をかけて、又船に乘つて立去るのに誰一人妨げるものもなく、散々に荒らした跡は白浪と逃れ去ることが出來たなどとは。

【註】 **In our own country** の own は「他の國ならば兎も角此の我が國に於て」の意。

worth taking「持つて行くに足る; 取る丈けの價値ある」。

without interruption「邪魔されずして」。

desolation 家は壞たれ人は殺され財寶は掠められて所謂火の消えた樣な狀態。

to leave behind「後に殘す」。此云ひ方は後に殘つた狀態を示すに用ゐ:

My father died, *leaving* his children to make shift for themselves. (父が亡くなつて取り殘された吾々子供達はどうにか自分の口を糊しなければならなかつた)。

Such forays (fŏr′ā) could not happen today, for things are now very different. But so that we may ŭndĕrstand′ how it was that such evĕnts′ could and did take place, we must glance back over the two thousand years of our rĕcŏrd′ĕd history.

構文解說

So that we may understand how it was that such……place,——こゝまでは附屬文 (Dependent Clause) にして下の行動をなす目的を示す。

we must glance back……history.

how it was that…… は「……の理由」と名詞に取扱ひ、understand てふ働詞の働を受くるもの(=目的格)なり。

【譯】 今日では此の樣な侵略など云ふものはあり得るものでない、ナニシロ事情がまるで異つて居るのだから。然し如何にし此樣な事件が〔假定上〕あり得たか、如何して恁麼事件が〔實際に〕起つたかを知らうとするには、吾々は有史以來二千年の昔に遡つて見なければならぬ。

【註】 **Foray**=raid「侵略、來寇」。

could not happen と could としたのは「迚もその樣な事はあり得ない」と强める爲めである。

so that we may——「——ことをしようと思へば;——する爲めには」。

how it was that=why「如何なる譯でかうであるか」。

such events could *take place* and **did** *take place* として見よ。 *could* take place は「起り得られた; 事情の

上から考へて隨分起り得べきことであつた」。—*did* take place は「(して又)實際起つた」。

to glance back「飜つて——見る; 頭を回して瞥見する」。

recorded history「記錄に殘つて居る歷史」で *legendary history* (傳說的歷史)と區別される。

When Julius Cæsar (jū′lĭŭs sē′zar), the great Roman general, landed in this country, in 55 B. C, he found it inhăb′ited by a half-civ′ilized pēo′ple, called Brĭt′ons. Cæsar himself did not conquer (kŏng′ker) Briton, but he told his people about the land, and some years afterwards the Romans sent soldiers who made our country into a Roman colony. And so it remained for about four hundred years, until the conquerors had to return to Italy, in 410 A. D., to defend their own city of Rome, which was being attacked by wild tribes from the North and East.

【譯】 紀元前五十五年に羅馬の大將軍ジューリアスシーザーが此の國に上陸した時に、此の國にはブリトン族と稱する半開の民が住居して居た。シーザー自身はブリトンを征服しなかつたが、彼は自分の國人に此島の話をした。 すると五六年

を經て、羅馬人は兵を送つて我國を羅馬の植民地とした。　そして四百年許りの間は植民地となつて居たが遂に、紀元四百十年になると征服者（たる羅馬人)は伊太利に還らなければならなかつた、北部及び東部より來た野蠻族の爲めに攻略されつゝある彼等の都ローマを防禦する爲めに。

【註】 **he** *found* **it** *inhabited* by……=**he** *found* that **it** *was inhabited* by……=he found that **a** half-civilized **people** called Britons *inhabited* it「その島が……に住はれて居たことを見た；來て見ればその島には……が住んで居た」。

made……into——「……を——とした」。

and so の *so* は「植民地として」の意。

remained, **until**……=remained, *and at last*……

B. C. は Before Christ「耶蘇紀元前」の略語。

A. D. は Anno Domini=In the year of our Lord「耶蘇紀元」の略。

Then the Britons were once more left to themselves. They had been taught many things by the Romans, but one lesson they had not learnt.

構文解說

They had been taught many things by the Romans.

上の如き文を受働態 (Passive Voice) の文と云ふ、主格 They (Briton 人) が働を他より受ける形なればなり。今上文をば

The Romans taught them many things.

とすれば同一の事柄を述べるに羅馬人を主格にして云ひたるにて、此時は主格たる羅馬人は働を them (Briton 人) に加へるのだから能働態 (Active Voice) と云ふ。

【譯】 そこでブリトン族は再び自由の身となつた。　彼等は羅馬人から澤山の事を敎へられた。然し彼等が學ばなかつた敎訓が一つあつた。

【註】 **were left to themselves**=were made free.「自由になつた」。

They did not see that the only way in which they could make themselves secure from an invā′der was to ūnite′ and oppōse′ him with all their strength at once. So when the second invaders—the Angles, the Jutes, and the Saxons—left their own homes for the purpose of conquering this country (which they had found to be better than their own), they overcame the Britons, tribe by tribe, and settled bit by bit on the land they won.

【譯】 彼等は悟らなかつたのである、侵略軍を

防いで彼等自らを安全にすることが出來る唯一の方法は、一致團結して全力を盡し一齊に之に當るにあることを。であるからアングルス、ジュート、サクソン等第二の侵略軍が家鄉を後に此國を征服しにやつて來た時も（これより先き彼等は自分の國よりも此國の方が優れて居ることを知つて居たのだが）片端からブリトン族を征服し、漸次勝ち得た領地に植民したのであつた。

【註】 **to make oneself secure from**「……から身を安全にする」即ち「……されない樣にする」。*from* に引離して置く意ある故、I will protect you *from* danger.（君を保護して危險に陷らぬやうにしよう）と打消に譯すを可とす。

with all their strength at once「全力を盡して一擧に」。此 *at once* は「直ちに」にあらず、「一ち時きに」。

for the purpose of「……の爲めに；の目的で」。

which they had found…… の had found といふ構造は「これより先きに實地に知つて居た」意を示して居る。

tribe by tribe「一種族づゝ」。

And where did these invaders come from? Their homes were on the banks of the rivers Elbe and Waser, in the Northern part of what we now call Germany.

【譯】 して此等の侵略者は何處から來たものであらう？ 彼等の本國は今吾々が獨逸と呼んで居る國の北部を流るゝエルベ河とウェーゼル河の岸にあつたのである。

【註】 **What we call** = the country which we call.

Fukuhara was situated in the vicinity of *what we call* Kōbe.（福原は今神戸となつて居る處の近くにあつた）。

For many years these people had been sea-pirates (pī′rāts) who, during the summer months, sailed about in search (sẽrch) of plunder. It is said, but this is a doubtful statement, that the first horde (hōrd) to land in Britain did so in 449 A. D., at the invitation of Vortigern, a British King. These men, led by two chiefs, Hengist and Horsa, came to help the Britons against their enemies from the North of Britain, but having done their work they refused to go away. They sent home glowing accounts of the land to their countrymen, who were tempted to leave their homes to find a place in the new and better country.

【譯】 永年の間此等の民族は海賊を業として夏の間此處彼處へ航行しては奪掠を事としてゐ

た。 疑はしい話ではあるが、かういふことである、此の盜賊の一隊が始めてブリテンに來たのは紀元四百四十九年で、ブリテン王ヴォーチガンの招きに應じて來たのである。 此等の人々はヘンギスト、ホーサと云ふ二人の頭に引率されてブリテン國を扶けて其の北方から來る敵を防ぐ爲めにやつて來たのであつたが、さて役目を果して了ふと歸ることを拒んだ。 彼等は此國での見聞を筆をきはめて立派に書き立てゝ母國の人々に送ると、之を見た同胞は此の新らしい、そして、より良い國へ來て落ち付き度くなつて來た。

【註】 **in search of**.....=in quest of.....「.....を求めて」。

the first.....to land——=the first.....*that landed*——「——へ上陸した最初の.....は」、

horde「盜賊又は蠻族の一隊」。

at the invitation of.....「.....の招ぎに應じて」。

glowing account「光彩ある記事」=「筆をきはめて立派に書き立てたる見聞錄」。

to be tempted to「.....したくなる」主に惡い意,

However that may be, it is certain that bands of these warriors very soon landed on various parts of the coast, and made war on the Britons, who were gradually

driven back into the mountains of Wales, Cornwall, and Strathclyed (the fertile (fĕr′-til *or* fĕr′-til) land west of the Pennines, stretching from the Mersey to the Clyde), where their descendants are found to this day.

【譯】 それは兎も角も、これは確かである——此等の數國の戰士は忽ち海岸の到る處に上陸しブリトン族に戰を挑んだ。 ブリトン族は段々追はれ追はれてウェールスの山中やコーンウオールやストラスクライド(これはメルズィ河とクライド河の間に横はり、ペニン山脈の西方にある豐饒の地である)の方に逃げ延びた。 ストラスクライドには今日迄其の子孫が見受られる。

【註】 **However that may be**「以上の話は虛僞であらうと眞實であらうとそれは偖て置き」。

made war on.....「.....戰を挑むだ」。

were driven back「擊退された」。

fertile「豐饒なる;肥沃なる」。

to this day「今日に至るまで」。

Many years of fighting there were; but as they won the land, the Angles and Saxons settled upon it giving up their sea faring life and becoming farmers. They

disliked cities and walled places, and were content′ (n. con′tent) to clear a part of the forest land, which covered a large part of Britain, and upon the clearing to build their homesteads.

【譯】 幾年も幾年も爭鬪を續けたが、土地を手に入れるや、**ア**ングル族や**サ**クソン族は其處に落着いて、海を對手の生活を止めて農夫となつた。彼等は町や、墻壁を繞らした場所を嫌ひ、**ブ**リテンの大部を蔽ふて居る森林の一部を伐り開き、其處に彼等の家屋を建てゝ滿足して居た。

【註】 **to settle upon**「遷住する; 落ちつく」。
to give up「放擲する」。
sea-faring life「海を歩く生活」即ち「船乘りの生活」。
to clear「木を伐つて土地を開く」。 海軍の所謂「掃海事業」を *clearing of the sea* と云ふ。

They loved their freedom, and at first settled in families, being quite independent, and obeying no law but their own will.

【譯】 彼等は彼等の自由を愛し、始めの間は一家一族は一團々々をなして住居を定めた、皆それ々々に獨立して、共通の法律はなく、その一家だけの掟に從ふのみであつた。

【註】 **at first**……「始めは……」。 此語あらば後に at last……「終には……」と變化したことを豫期し得るなり。
to settle in families「families をなして; 一家一家が團隊をなして」。 例:—
They camped *in small groups.* (彼等はこゝに一團かしこに一團と露營した)。

But there was still constant strife in the country. The Britons were never completely driven out, and Angle, Jute, and Saxon, though they were all of the same race, fought with each other continually. Thus the family settlement was not strong enough to secure peace for itself, and in time the families grouped themselves into tribes, and then into kingdoms.

【譯】 然し國内には猶爭鬪が絶えなかつた。**ブ**リトン族はスツカリ驅逐されてしまひはしなかつた。そして**ア**ングル、**ジュ**ート、**サ**クソンは皆同族でありながら互ひに絶えず爭つて居た。 斯樣な有樣で、此の家族的植民地は自己の平和を得る爲めに十分强固でなかつた。 で、やがて家族は團結して種族となり、更に王國となるに至つた。

【註】 **with each other**「互ひに」。

to secure—for oneself「……を得る」。

in time=in due time「やがて其のうちに」。

grouped themselves **into**……「自ら團結して遂に……を成した」。

In this way the Angles, who first settled in Norfolk and Suffolk, founded the kingdom of East Anglia. A branch from the same tribe crossed the Fens, and in the middle of England made the kingdom of Mercia, in what we now call the Midland Counties. Other bodies of Angles attacked and conquered a broad strip of land along the East Coast (from the Humber to the Forth), and this became the kingdom of Northumbria.

【譯】 此の樣にして始めてノーフォク及びサッフォクに植民したアングル族は東アングリア王國を建設した。 同族の一支族はフェンズ河を越えてイングランドの中部、今の所謂中部地方に、マーシア王國を立てた。 其の他のアングル族の團體は東海岸(ハンバー河からフォース河迄)沿ふた廣い一帶の地を攻略し、之がノーサンブリア王國となつた。

【註】 **In this way**「斯樣な風に」。

founded……「……を建設した」。 此字は *found*「建設する」の過去形にして、find「見出す」の過去 found と混同する勿れ。

in what we call……「今吾々が……呼んで居るところに」55 頁參照。 例:—

Dokwan erected his castle *in what we now call* Sakurada. (道灌は今櫻田となつて居る處に城を築いた)。

Midland Counties 英國の中部諸州の總稱。

a strip of land「細長い土地」。 strip と land と關聯して記憶せよ。

The Jutes settled in Kent, whilst the East Saxons, South Saxons, and West Saxons, lived in the kingdoms of Essex, Sussex, and Wessex.

【譯】 ジュート族はケントに土着した。 東サクソン族、南サクソン旗、西サクソン族は夫々エセックス王國サセックス王國ウェセックス國王に居住した。

【註】 **whilst** 前と後との事柄が相對照さるゝ場合に用ふる接續詞なり *while* の形の事多し。

This latter kingdom occupied what we now call the counties of Hampshire, Berkshire, Wiltshire, Dorset, and part of Somerset. The land North of the Humber,

called Northumbria, extended inland to the Pennines.

構文解説

This latter kingdom occupied

what (=**that,** *which*) we now call { Hampshire, Berkshire, Wiltshire, Dorset, part of Somerset

上文は occupied といふ動詞の目的は what の中に含める that にして which 以下は that を説明する文なり。これを正直に譯すれば。

「上述中、末尾に擧げたる國は今吾々が H. B. W. D. S. と呼んで居るところの (which) 場所 (that) を占めて居つた」。

さりながら、邦語の譯としては *what we call* の部分を「所謂」として形容句の如くして差支なし。

【譯】 以上の王國中最後の物は今の所謂ハンプシヤ、バークシヤ、ウイルトシヤ、ドーセツトの諸州竝にサマセツトの一部を領して居た。ハンバー河以北の地のノーサンブリアは内地の方に延びてペニン山脈に達して居た。

The boundaries of these kingdoms were not always strictly laid down; they changed

from time to time. Neither were there always the seven kingdoms named.

【譯】 此等の王國の境界は常に嚴格に劃られてはなかつた。時々變更した。亦此處に列擧した樣な七王國も何時でも存在したのではなかつた。

【註】 **the boundaries.....were not laid down**「.....の境界が劃定されなかつた」。

from time to time「時折」。

neither were 上の「境界も區別せられず」を受けて「亦七王國は何時も七王國として存在しなかつた。(六にもなれば五つにもなつた)」の意。

always を **not** (上文にては *Neither* 中に含む) にて打消すときは「常に.....ではない=.....でないこともある」の意。

It must be kept in mind that, although at first the people in these divi'sions were of the same race, with language (lăngwăj) and customs almost exactly alike, yet after many years the kingdoms became quite separate and distinct.

【譯】 記憶して置かねばならぬ、此の樣に種々に分たれた民族も、始めの中は言語も習慣も殆んど全く同じくて、同一種族のものではあつたが、多年の後に其等の王國は全く明らかに個々に分裂したといふことを。

【註】 **It must be kept in mind that** = *You must keep in mind that*.....「.....を記臆しなければならぬ」。
in these divisions「斯く別れたる」。

The language al′so changed, and in time the Northumbrian could not understand the speech of the West Saxon. New customs and new laws were made, and the parts grew more "foreign" (fŏr′ĭn) to each other. The king, the thanes(thānz), and the people, looked for nothing better than war with all the other "nations" first, and with invaders afterwards.

【譯】 言語も亦變つた、そのうちにノーサンブリアの民は南サクソンの言葉が解らなくなつた。新たな習慣新たな法律が造られ、各部は互に段々他所よそしくなつた。 王も貴族も人民も、戰爭するより外に能(のゝ)はなかつた。 初めは〔原と同族なるも今や互に〕他國民視して居る諸州の間に、後には外來の侵略者を相手に。

【註】 **in time** = by and by「やがて」。
foreign「他所々々しい」。
Thane 古英國に於て貴族と農民との中間の階級。
looked for..... = expected.....「.....を期待した」。
nothing better than「戰爭は彼等の最も期待する所のものであつた」。

Still, in spite of all this, Saxon England advanced in many things. The bŭlk of the Anglo-Saxons forsook (fōrsŏŏk′) their old Norse Gods and became Christians. Monasteries were built, and clever priests taught the people. The homes were made more cŏm′fortable and hung with tapestry (tăp′ĕs-trĭ), which the women worked often in beautiful designs (dēzĭnz′).

【譯】 それにも拘らず、サクソン英國は多くの事に進歩した。 アングロサクソンの大多數は彼等に傳來の北人の神を棄てゝ基督教徒となつた。寺院は建立せられ、名僧は人民を教導した。 家は居心地よく造られ、その壁は壁絨(タペストリ)で飾られて、〔しかも〕それは婦人の手細工で往々美しい紋樣(かた)であつた。

【註】 **in spite of**.....「.....にも拘はらず」。
to advance in.....「.....が進歩する」。 in の前置詞に注意。
bulk「大部」。
forsook *forsake* の過去形。 God *forsakes* nothing. (神は何物をも捨てず)などと用ふ。
Norse Northmen の別名。
were (.....) **hung with**——「——を懸けて飾られてあつた」。

Tapestry「花氈」。壁などの裝飾に用ふ。

which the women worked の *work* は「細工をする」意にして他動詞なり。

As time went on the people gave up many of their old ways. They were no longer sea-pirates, for they had settled down and become farmers, only putting on the armour of the warrior when necessary (nĕs′e-săr-ĭ), and then for very short periods at a time.

構文解說

.....and become farmers, only *putting* on——の putting を *and put* on ——とし only を when の前へ入れて更に when の次へ *it was* を入れて、下の如くして見よ:

.....and **become farmers** *and* **put on the armour** of warriors *only* when *it was* necessary.

---

and *then* for.....

=and *when they put on the armours* **they did so** for..... (そして彼等が鎧を著た時にも.....だけ著たのだ)。

但し、かくする時は邦文に譯し易いけれども英文としては and が重なりて感心せず。

【譯】 時代が進むに隨つて此の民族は彼等の舊慣の多くを捨てた。 彼等は最早海賊ではなかつた。 ナニシロ彼等は既に土着して農夫となり、必要のある時には鎧兜も着けるが、それも一寸の間丈けであつた。

【註】 **As time went on**=with the progress of time「時が進歩すると共に」。

their old ways「彼等の古い風習」。

at a time「一回に」とは「一度武裝を着ければつゞいて」の意。 He stays in Tokyo for months at a time. (東京へ來ると何ヶ月もつゞけて居る)。

no longer.....「最早.....でない」。

to put on.....「.....を着る」「被る」「穿く」。 執れにも用ふ。

for very short periods「極めて短い期間」。

With their herds of swine roaming in the forests, and their oxen ploughing (plowing) the land, so that they might sow wheat and barley, the descendants of the wild sea rō′vers from North Germany were in point of civilization far ahead of their forefathers. And it seemed at one time as if the whole country was to be united under one king. In the strŭg′gle bētwēen′ the vā′rious king′dŏms, three—Northumbria,

Mercia, and Wessex—had shown themselves the strongest, and had taken in the lesser states. At length, Wessex became the chief power in the land, and, in 827 A. D., Egbert, its king, became King of the English.

【譯】 森に放し飼にしてある豚を有つて居るし小麥や大麥を蒔く下拵へに土地を耘る牡牛も有つて居る今日では獨逸から來た海上のさすらひ人の子孫は、彼等の祖先よりもズーツと開化して居た。 そして一時は全國が唯一人の王を戴いて結合されるかの如く見えた。 幾多の王國間に勢力爭があつた中でノーサンブリア、メルシア、ウェセツクスの三王國は最も强くて弱い方の國々を併呑し遂にウェセツクスは其の國の主力となり、紀元八百二十七年其の王エグバートは英國王となつた。

【註】 **With** .....=Having ..... 「.....を有って居て」=「.....を有って居たから」。

Swine 「豚(集合體として云ふ、一頭なきゝず)」。 此の時代に於て豚は地主の主要財產なりき。

to roam 「徨ふ」と云ふ字なれど譯文の如くする方實情を表はす。

in point of .....「.....の點に於ては」とは、「武力などは劣つて來たかもしれぬが」の意。

far ahead of .....「.....に遙かに先んじて」。

比較:—

(*a*) Russia is *behind* Germany in civilization.

(*b*) Japan is *ahead of* China in civilization.

to taken in 「攻略する」。 俗語では「欺す」。

But it was not for long; the lesson had not been learnt, and, like the Britons whom they had conquered, the Saxons did not see that the only way in which they could keep the country for themselves was to unite and fight all together, side by side. Egbert died, and no longer was there even a nŏm′inal head.

構文解說

the only way.....*was* **to unite**——

此の文の主格は *way* にしてその動詞は *was* 而して was は不完全自動詞と云ひて後に必ずそれを補ふ語來る、此場合には *to untie*..... がその補語なり。 かゝる to は決して「.....すべく」と譯すなかれ「.....することで」なり。

【譯】 然しそれも長くはなかつた。 學ぶべき

大事が閑却されて居た、サクソン族は曾て自分等が征服したブリトン族〔が氣が注かなかつた〕と同樣に、彼等が自國を保持することができる唯一の道は一致協同して共に敵と戰ふことにあることに氣が注かなかつた。 エグバートは崩御し、最早此國には名義上だけの君主さへもなくなつて了つた。

【註】 **it was not for long**「ウェセックスが優勢であつたのは長いことぢやなかつた」。

the lesson「教訓」とは即ち「一致共同して敵に當らなければ國の安全は保たれない」とのこと。

did not see＝did not realize「覺らなかつた」。

keep the country for themselves「自分達のものとしてその國を保持する」。

side by side「相並んで」。騎馬武者ならば「轡を並べて」。

nominal「名前丈けで實權の無い」。

Each kingdom was again sĕp′arate, with its own king and its own battles to fight alone. What happened in Northumbria was only of passing interest to the East Anglians, and the people of Wessex took no heed of the troubles in East Anglia. Each was concĕrned′ solely with its own

affair, and only in very rare cases did one "nation" extend′ a hand to help its neighbour (nā′bûr).

構文解說

only in rare cases **did** one "nation" **extend** a hand..... は

one "nation" **extended** a hand.....in rare cases と意同じけれど、「稀れであつた」即ち *in rare cases* の部分を强く印象させん爲めに之を冒頭へ出す時は、*did.....extend* とす。

【譯】 王國はまたもやそれ々々に分裂し、各自に王を戴いて相互に戰を交へた。 ノーサンブリアに起つた事は東アングリアンに對してはホンの向ふ河岸の火事に過ぎず、又ウェセックスの人々は東アングリアの騷動には一向お構ひなしであつた。 各國は只管自分の政事にのみ沒頭して、一國が手を伸ばして其の隣國を救ふ樣なことは極めて稀れなことであつた。

【註】 **its own battles to fight alone**「(共同的の戰にあらぬ)自分の國だけの利害上で戰ふ戰爭」。

of passing interest「通り過ぎる樣な興味」とは所謂「雲烟過眼視した」の意。

to take no heed of....「.....頓着しない、顧みない」。

was concerned solely with……「……に沒頭した」。

in very rare cases「極めて稀れな場合に」即ち「殆んどこんな場合はない」。

to extend a hand to help「手を伸ばして助ける」。所謂「……臂の力をかす」に當る。

And troubles enough there were, for a people very similar in character to the Anglo-Saxons, who had conquered the Britons, were trying to make the country their own.

構文解說

and troubles enough there were＝and there were troubles enough 順序を顚倒したる理由は前項に說けるに同じ。

a people＋〔who were〕very similar in character to

the Anglo-Saxons＋*who had conquered the Britons*

were trying

此文に於いて、黑文字の部分は主格とその動詞にして、people の後の並字の部分は people の性質を形容したもの、Anglo-Saxons の後のイタリツク文字の處は Anglo-Saxons を說明したるもの。

【譯】 して又隨分と多事であつた。 といふのは性質に於てブリトン族を征服したアングロサク

サソン族によく似て居る一種族が此國を我がものとしようとして居たのであるから。

【註】 **troubles enough there were** は there were troubles enough を顚倒したもの。

similar to……「……に類似せる」。 to に注意。

their own の次に country を補ひて見る可し。

From Norway and Denmark and the islands of the Baltic Sea, came the third invading race, to attack the Angles as the latter had attacked the Britons. The lands of these Northmen were cold, and the ground which they tilled produced barely enough for them to live upon. By hunting and fishing they added to their store of food and clothing, but their life would have been a hard one if they had nothing to relieve (rĕlēv′) the drudg′ery of their toil.

【譯】 曾てアングル族がブリトン族を攻擊したと同じ樣に、ノールウェイデンマーク及びボルチツク海の島々から第三侵略民族がアングル族を襲ひにやつて來た。 此等の北人の住む土地は寒冷で、彼等が耕やした土地からとれるものでは命を繋ぐが困難(かつかつ)であつた。 山に獵り海に漁つては衣食の料を補ふたのであるが、其の勞苦を脫する方

法が何かなかったら彼等の生活は辛い苦いものであつたらう。

【註】 **barely enough**「辛ふじて事足る」。
to live upon.....「.....を常食とする」。
to add to「附加する、加へる」。
to relieve ..... **of** —— 「.....の爲めに —— を除去する」。

During the summer months, however, the men went on board their ships and sailed away to other countries, where they landed, seized everything of value, and often killed the people. In our first chapter we read of how a small body of these men came in two ships and attacked the people of Bosham.

構文解說

to other countries, where they landed の where は *and there* に代るものにして、之を下から譯して、「彼等が上陸したところの國」とすべからず下の例と區別すべし:—

This is the house *where* I lived once. (此れはモト僕が住んでた家だ)。

▲ 8 頁を參照せよ。

【譯】 然し夏の間は彼等は船に乘つて他の國々に押渡り、上陸しては金目のものは何でも押收し、又屢々其の國人を殺した。 吾々は此本の第一章で讀むだ、此等の人々の小さな團體が、二隻の船に乘つて來て**ボ**スハムの人々を襲ふた一伍一什(いちぶしじう)をば。

【註】 **go on board a ship**「船に乘る」。
everything of value = everything valuable「高價のものは何でも殘らず」。
a small body「小さな團體」。
came in..... の in は勿論「乘つて」の意。

The plunder they obtained enabled them to live in comfort at home, to have good clothing and to wear the best armour and arms which were made at that time. During the winter months, as the warriors sat round their heärth-fires, tales of daring were told and sung, and glowing pictures made of the lands they had visited in the summer. The young men, hearing these wonderful stories, became filled with a desire to win fame for themselves, with the result, that each succeed'ing year saw more ships put out to sea and larger bands start off on much bigger raids.

【譯】 彼等は掠奪した物資(しなもの)の御蔭で氣樂の生活もでき、良い衣物も着られ、當代で最も優れた武器裝具を身に着けることもできた。 冬の間戰士が爐火を圍んで坐ると、豪快な手柄話が出たり、歌になったり、さては夏の間に攻めて行つた國々の光景を目に見る如く語り合ひなどした。 若き面々は此等の驚異すべき物語を聽いて、天晴功名をしたいものとの欲望に充たされ、その結果として、毎年毎年海外に出る船が多くなり、大きな團體が從來よりも大仕掛の侵略に出掛けた。

【註】 **to live in comfort**「安樂に生活する」。

glowing pictures=vivid description「あざやかな叙述」。

to be filled with a desire「——したといふ念で一杯になる」。

with the result that.....「その結果は.....といふことになつた」。

each succeeding year saw ——「其の後は毎年毎年.....ことがあつた」と云ふことを擬人法を以て表はしたのである。 注意せよ、succeed が（繼續せる）意なることに。 ▲89 頁參照。

start off on の *on* は go on errands の on と同一。

These people are gen'erally called the Danes, but other and more correct names

for them are the Northmen and the Vikings. The last word means "creek-dwellers," and was probably given to them because they anchored (ang'kêrd) in bays and "creeks," and came out of them in search of plunder.

【譯】 此等の人々を一般に呼んでデーン人と云ふけれども他にもつと正しい名前はノースメン若くはヴァイキングである。 後者は「入江の住人」の意味で、これは恐らく彼等が港灣や「入江」に碇泊し、其處から掠奪に出かけたところから、かう名づけたのであらう。

【註】 **generally**「一般に」;「通俗に」。

in search of.....「.....を探して」。

The Danes were quite at home on the sea. They were fearless sailors, and brave, but cruel soldiers; "cunning as foxes and fearless as wolves." They loved fighting for its own sake, so much so that their idea of heaven was a place where there would be continual fighting by day, and feasting by night. If they fell in battle they believed they would straightway be taken to this home of the gods, which they called Valhalla.

【譯】 デーン人は海の上には住み馴れたものであつた。彼等は恐いことを知らぬ船乘であつた。勇敢な、然し、殘酷な兵隊であつた。「狐の如く狡猾で狼の如く命知らず」であつた。彼等は戰ふこと夫自身を好んだ。であるから、彼等が心に描く天國は、日中は絶えず戰ひ、夜中は飲食に耽る所であつたのである。一朝彼等が戰鬪で斃れたならば、彼等は直樣ヴアルハラと呼ぶ神の家に連れて行かれるものと信じて居たのである。

【註】 **were at home**「自由であつた、慣れてゐた」。

I am now quite *at home* in class. (今ぢや僕は教場でスツカリ場馴れがした)。

He is quite *at home* in English. (彼は英語は自由自在だ)。

Make yourself *at home*. (お樂になさい)。

They loved fighting for its own sake「彼等は戰爭に伴ふ種々の利益の爲めに戰爭を好んだのではなく戰爭すること夫自身が好きだつたのである」。

so much so that……「……その好んだ度合は……ほどで」。

by day……by night——「晝は……、夜は——」。

fall in battle「戰死する」。

straightway「外へは寄らず直樣」。

The first of the Northmen to land in England did so in 787 A. D. In the *Anglo-*

Saxon Chronicle, from which much of our information of this period is obtained, we read that "Three strange ships came out of Denmark. And then the reeve (rēv) rode to the place, and would have driven them to the King's town, because he knew not who they were, and they slew him." This, then, was the beginning of the struggle which lasted for about two hundred years.

【譯】 最初に英國に上陸した北人は紀元七百八十七年に來た。『吾人が』此の時代に關する知識の多くを得た「アングロサクソン記」にかう書いてある。『三艘の異樣の船がデンマークから出て來た。そこで長官が其の場所に赴いた。そして彼等の素性を知らない彼は、彼等を王城へ召連れやうと思つたが、彼は彼等の爲めに殺された』。これが卽ち約二百年の後迄も續いた爭鬪の端緒である。

【註】 **Reeve**「一種の長官」。

to last「繼續する」。

would have driven them to the king's town = *intended to* drive them to the king's town *but could not*「王樣の城へ追ひ立てゝ行かうと思つたが出來なかつた」。例:—

I would have gone there = I intended to go there, but could not. (そこへ行かうと思つたが出來なかつた)。

尙 *town* てふ語は「强固なる垣や、堀を匝らしたる家」

の意義から出て今日の「町」の意に移り來れるなり、此處にては原來の「防禦工事ある町＝城」。

The *Anglo-Saxon Chronicle* is a most valuable book. It was begun by order of King Alfred, and is really a "History of England" from very early times until Henry II. came to the throne, in 1154. It begins with the early Britons, but much that it tells us of what took place before Alfred's reign (rān) is perhaps not very trustworthy, for the monks who wrote this history of past events could only tell the tale as it had been told to them—there were no newspapers nor printing in those days. In Alfred's reign, and afterwards, the history was written down as the events occurred, and as the *Chronicle* was continued for more than 250 years after his death, it is, for us, a most valuable record of important occurrences.

構文解説

much

that it tells us of what took place before Alfred's reign

is.....

多くの事柄 (much)

それを (that) 此本が (it) アルフレドの治世以前に (before Alfred's reign) 起つた事物 (what took place) に就いて (of) 吾々に語る (tells us)

〔は〕.....**である (is)**

上文は much が主格にして、is がそれを受くる動詞なり、而して引つ込めてある部分は much を形容する文言にして、日本語に譯す時は此形容の部分から先きに譯すを常とす、此日英兩語の組立方の差に注目すべし。比較:—

私が米國で買つた時計は狂ひませぬ。
The watch which I bought in America keeps good time

【譯】「アングロサクソン記」は最も貴重な本である。それはアルフレツド王の命に依つて書き起されたもので、極古い時代からヘンリー二世が千百五十四年に即位する迄の「英國の歴史」である。それは、初期のブリトン民族から始まって居るが、アルフレツド朝以前の出來事に就いて書いてあることの多くは餘り信用するに足らないかも知れぬ。と云ふ譯は、過去の出來事を此の歴史に書いた僧侶等は、單に自分等が人から聞いた儘を人に語るより他に詮方がなかったのである——〔ナニシロ〕其頃は未だ新聞もなく印刷術もなかっ

た〔のだから〕。 アルフレッドの時代及び其以後になると、事件のある毎に之を歴史に編んだので、しかも此の歴史は彼の歿後二百五十年の間繼續して居るものであるから、我々にとつては重大な出來事の最も貴重なる記錄である。

【註】 **by order of**……「……の吭附で」。
to come to the throne「帝位に即く」。
trustworthy「信憑するに足る」。
as it had been told「これ迄傳へられて來た樣に」で口碑のことであるから當てにならぬ意。
to write down「書き付ける」。
of important occurrences「重大な出來事の」。

But there is another book that tells us much about King Alfred and his times. It is always called, nowadays, *Asser's "Life of Alfred,"* and was written by Asser, a learned monk of St. David's, in Wales. Asser was born about the year 850. Alfred heard of him, and as the King was always pleased to have men of learning and skill about him, he invited Asser to his Court. Here Asser lived at intervals until the King's death, assisting him in his studies and helping him with his counsel and advice, and so much were the two men

attached to each other, that they were more like brothers than a King and his subject. Asser appears to have been quite worthy of the King's friendship, and Alfred appointed him, in 900, Bishop of Sherborne, in Dorset (so the *Anglo Saxon Chronicle* tells us); here he died about 910, that is, nine years after the death of his friend the King.

【譯】 アルフレッド王丼に其の時代に就て語つてゐる本が也一つある。 其れは今ではアッサの「アルフレッド傳」で通って居て、ウェールズに在る聖デーィヴィド寺院の學識ある僧アッサの書いたものである。 アッサは略八百五十年頃に生れた。アルフレッドは彼の噂を聞くと、日頃學識あり、才能ある人を左右に侍せしむるを好むだ王樣であるから、早速アッサを宮中へ招致した。 アッサは常住ではなかったけれど此宮中にあって王の研學を助け又意見を述べ忠言を與へて王を補佐しつつ王が崩御の時迄仕へた。 そして此の二人は餘り親しくなつたものだから、國王と其の從者と云ふよりも寧ろ兄弟の樣に見えたのである。 アッサは非常にアルフレッドの信用を得たらしく、九百年にアル

フレッドは彼をドーセットに於けるシャ〜ボンの僧正に任命した（とアングロサクソン記に書いてある）。此地で彼は九百十年頃に歿した。即ち彼の友なる王の死後九年である。

【註】 **at intervals**「間隔をおいて」、「常侍はしなかったが」。

were (.....) attached to each other「お互に愛着した」即ち「親密だった」。

more like.....than——「——よりも寧ろ.....の方に見える」。

to have.....about him「.....を自分の傍に居らせる」。

to assist.....in——「——の點で.....を扶ける」。

to be worthy of one's friendship「.....の交友に價する」即ち「友として交はるに足る」。

At first, the Danes did not come to England to stay; all they wanted was plunder, and having sailed up the rivers or landed on the coast and seized what they could, they drew oft before an army could be brought against them.

【譯】 初めデーン人は在住する目的で英國へ來たのではなく、彼等は奪掠さへすればそれでよいのであった。そして船で河を遡り、又は海岸に上陸し、出來る丈けの物を奪ひ取っては、彼等に對抗

させる爲めの軍隊が來ない中に逃げ失せたのである。

【註】 **all they wanted**「彼等が要する總て」即ち「これ以上に要らぬと云ふところが」。

seized what they could の次に seize を補ひて解す可し。

to draw off「退去する」。

to sail up 河を遡る意にて up を附す。

But the condition of the country, divided as it was, made it easy for them to remain, and so, as their bands grew larger, they did not return to their homes for the winter. Instead they drew up their ships out of the water, and secured them on the bank, made a camp, and waited for the coming of spring, when new bands would join them, and they could again spread over the country.

【譯】 然し、此國の狀態は、宛も四分五裂して居たので、彼等が止まることを容易ならしめた。それ故に彼等の團體が段々大きくなるに從つて冬が來るとて歸鄉しなかつた、歸國しないで彼等は船を水中から引き上げてそれを岸邊に安置し、幕舍を作つて春の到來を待つて居ると、更に新た

な一團が加はつて、彼等は再び國内に跋扈することができた。

【註】 **divided as it was**=it *being* divided=*as* it was divided　次の Bible の句を參照せよ:—

Every kingdom divided against itself is brought to desolation; and every city or house divided against itself shall not stand.—*Matt. 12; 25.*

for the winter「冬籠りに」。

instead.....「.....せずに、その代りに」。

to draw up「曳き上げる」。

to wait for.....=await.....「.....を待つ」。

to secure them on the bank「岸の上へ曳上げて水に流されぬ樣にして置く」。

to spread over.....「.....に擴がる」。

Then began the real fight of conquest (kŏng′kwĕst). Beginning with Northumbria, the Danes speedily made themselves masters of the whole of England, with the exception of Wessex. Stories of horrible cruelty are told of them, and their line of march was marked by the charred (chärd) remains of fire-eaton homesteads. "Everything was destroyed—order, peace, religion."

【譯】 其處で領土征服の眞劍の戰が始まつた。先づ第一にノーサンブリアから改略しデーン人は

忽ちにしてウェセックスを除いて全英國の覇王となつた。身の毛もよだつ樣な殘酷な話が彼等に就いて語られてある。そして彼等の前進の線は火に嘗められた家屋の黑焦げになつた遺物に依つて示された。『悉く灰燼に附せられたり——秩序も、平和も、宗教も』。

【註】 **real fight of conquest** これ迄の戰は戰の爲めの戰であつたのだが此の時から「眞の征伏の爲めの戰」が始まつたのである。

charred「黑焦になつた」。

fire-eaten「火に食べられた」即ち「燃えた」　尙 Fire broke out in Kanda last night which *ate up* nearly two thousand houses. などと云ふ。

The heathen took a special dĕlight′ in the murder of priests and monks, and who could not fly, suffered death. The King of East Anglia, Edmund, afterwards called the Martyr, was bound to a tree and shot at with arrows until he died. "Nothing was left to the unhappy land except terror, blackened ruins, and the memory of peace."

【譯】 此等の異端の徒は僧侶を殺戮することを特に快として居た。そして逃れることのできない者は殘らず死の苦みを受けねばならならなかつ

たのである。　東アングリアの王エドマンド——後には殉教者と云はれた君——は樹に縛られ的にされて嬲り殺しに射殺された。『恐怖と、黑焦の遺物と、〔今は何處にも樂む能はざる〕平和の追憶より以外に此の不運の國には何物も殘らざりき』。

【註】 **to take delight in**……「……を面白がる」。
to suffer death「死の苦みを蒙むる」。
to be shot at with……「……で射殺される」。
memory of peace「平和の追憶」とは此の樣な戰亂の巷となつてしまつたので、平和といふものは人の記憶に殘つて居るばかりだ。

Wessex was the only part which remained to the Saxons. It was the duty of Wessex to beat back the invaders, and so make possible that deve'lopment of our country which (a thousand years later) finds it the centre of the greatest empire the world has known. Nobly was the duty performed. Britons in all parts of the world owe a debt of gratitude to the men of Wessex, and to their King, Alfred the Great.

構文解說

It was the duty of Wessex
to beat back……
and so

[to] **make possible that development of our country**
which (=development) finds
it (=our country)……

黑文字の部分が主格にして、冒頭の *It* はその代表者一行目 was 以下が賓詞なり。 which 以下の部分を直譯すれば「その發達が、我邦をば、世界に前例なき大帝國の中心と見出す」となる。 此種の言ひ廻しは日本語には用ゐられぬ故、「その發達の結果……の中心となつて居る」と譯してよし。
▲ 76 頁參照。

【譯】 ウェセックスはサクソン民族の手に殘つた唯一の部分であつた。 侵略者を擊退し、(一千年後)我國をして世界あつて以來の最大邦土の中心たらしめたその發達を遂げしむることはウェセックスの義務であつた。 其の義務は立派に果された。 世界のあらゆる部分に居るブリトン人は、ウェセックス人及び其の王アルフレッド大王に感謝を以て報いなければならぬ。

【註】 **The centre of the greatest empire the world has known**「世界が今迄に知つた (=古來例しなかりし the world has known) 最大の國の中心」、とは The British Empire は印度、加奈太、濠洲、阿弗利加等の領土全體の稱にして Britain はその中心なればなり。尙英人は "empire" を海外領土の意に用ふること多し。

CHAPTER III.

The Sea-King's Burial

第三章 海王の水葬

Many stories are told of the Northmen which show that they could endure' pain without a murmur. It is said that one of their chiefs, being captured by a Saxon king and told that he must either marry king's daughter or be burnt at the stake, to show his contempt' for his captors, chose the latter fate.

構文解說

Many stories are told が主要部で *which show .....murmur* はその stories が如何なることを示すかを説明したるものにして、stories に屬する形容句 (Adjective Clause) なり。此文を下の如く改むるも意は同じ:—

Of the Northmen **there are told many stories** *which show.....murmur.*

---

and told that.....at the stake の部分を下

の如くすれば Saxon 王の言葉を直かに表はすことゝなり、之を直接敍法といふ:—

And then the Saxon King said to him, **"You must either marry my daughter or be burnt at the stake."**

【譯】 北人が一言の不平もなく、よく苦痛を堪へ忍んだといふことを示す澤山の物語がある。彼等の酋長の一人が、サクソン王の捕虜になつて、王の娘を娶るか、さもなくば火焙りにされるぞ、と言はれた時に、彼れは、我れは今捕虜の身なれど汝等と齒するを耻づるぞ、とばかり好むで火焙りになつたといふことである。

【註】 **either.....or**——「.....か.....—かどちらか」。

the stake「往時火炙りの刑に處せらるゝ者の縛られた柱」。 *He died at the stake.* とあらば(火焙された)意なりと知れ。 尙、西洋の火刑は我邦の八百屋お七のそれとは異り柱へ縛りつけてその脚下より燔き殺すなり。

show his contempt for his captors「彼を捕へた人 (his captors) に對する輕侮を示す」。 譯文に「我れは今.....ぞとばかり」と意譯したり。

the latter fate「後者の運命」とは前の文中に Saxon King の娘を娶ること、火焙りになること、二つの fates があるそ後の方、即ち、「火焙りの運命」を指す。

A great Danish chief named Rag'nar

Lod′brog was wrecked (rekt) upon the coast of Northumberland. Ella, the Saxon king, cast him into a pit which contained a large number of vĕn′ŏmous serpents. Whilst dying in this way the warrior sang a death chant which became a kind of war-song with the host who came to avenge (ȧ-vĕnj′) him.

【譯】ラーグナル、ラドブローグと云ふデーンの偉い酋長が破船してノーサンバランドの海岸に打ち揚げられた。サクソン國王のエラと云ふ人が、之を毒蛇の澤山入れてある土牢の中に投げ込んだ。こんな死に方をしながらも其の勇士は此世の名殘りに歌を歌つた。其の歌はやがて彼の復讐に來た軍勢に一種の軍歌になつた。

【註】**Rag′-nar Lod′-brog**「九世紀に於ける北人の勇士(傳說上の)」。

was wrecked「難船した」。注意:一日本語の「難船する; 難破する」が英語にては "to *be* wrecked" と受身の形となる。

coast の前置詞は upon, on なるに注意。

venomous「毒を含める」。

a large number of……「澤山な……」。

contained……「……を含むだ; ……を容れてあつた」。

in this way「此の樣にして」。

to avenge……「……の爲めに仇を報ゆる」。Musashi *avenged* his father upon Ganryu. (武藏は岸柳を討つて父の仇を報じた)。

比較:—*revenge* oneself upon…… は (自分の受けた怨を……に報ゆる)。

"The old Norse Kings, when about to die, had their bodies laid in a ship, then the ship was sent forth with sails set, and slow fire burning in it, that, once out at sea, it might blaze up in flame, and in such manner bury worthily the old hero, at once in the sky and in the ocean."

構文解說

The old Norse King (……) **had their bodies laid** in a ship が主部にして *when* (they were) *about to die* は次の had…… の行爲の起る時を示し、*in a ship* はその行爲の場所を表はす。

the ship was sent forth が主部にして、*with sails set* 及び、slow fire *burning in it* は sent forth された時の船の狀態を示す。*that* (,……,) *might*……は火の燃してある目的を示す。

【譯】『昔のノースの國王達は身將に死せんとするや體軀を船に載せさす。船は帆を上げて進む、船の中では燻り勝に火を燃やしてある、その

火は、船が一度沖へ出ると焔を立てゝ燃え上り、かやうにして、件の英雄を其の身に應はしく、空と海とへ同時に葬るやうになつて居たのである」。

【註】 此の節はカーライルの Heroes and Hero Worship から拔いたものである。

had their bodies laid in a ship「船中に横へられたる彼等の身體を有つた」といふやうな直譯は愚、*have* に「させる」意があつて、「頭(髪)を刈らせる」は "*have* one's hair out" といふと習つたからには、「自分の身體を船中に横臥させた」と譯すに苦しくはない筈。

with sails set「揚げられた帆を持つて」とは「帆を揚げて」の意。

參考:—to *lower* a sail「帆を下ろす」。

that.....it might blaze in.....「.....をなして燃え上る樣に……」。

that.....might は火が燻り勝ちに燃してあつた目的を示す故、譯文の末尾に「.....るやうになつて居たのである」と譯したり。

The following poem illustrates the Northmen's contempt for pain and death. They believed that when they died they would be taken to Valhalla, the home of their Gods, there to spend their time in continual feasting and fighting.

構文解說

They believed that (.....) **they would be**

taken to Valhalla が主部にして *the home of their Gods* は *Valhalla* を說明したる Apposition にして、*to spend* 以下は be taken の目的を示す。

【譯】 次に揭げる詩は北人の苦痛及び死に對する侮蔑を表はして居る。 彼等はかう信じて居つたのである——自分等が死ねば自分等の神と仰ぐヴァルハラの許に連れて行かれる。 其處には仕切りなしに御馳走や爭鬪があるのだと。

【註】 **to illustrate**「鮮明に顯はし示す」。

to spend one's time in.....「.....に時を費す」。

continual「聯續したる」。

fighting が Norse men にとつては何より結構なものなることを思ふべし。

THE SEA-KING'S BURIAL

I.

"My strength is failing fast,"
Said the Sea-King to his men ;—
"I shall never sail the seas
Like a conqueror, again.
But while yet a drop remains
Of the life-blood in my veins (vānz),
Raise, oh, raise me from the bed ;—
Put the crown upon my head ;—

Put my good sword in my hand;
And so lead me to the strand,
Where my ship at anchor rides
Steadily;
If I cannot end my life
In the bloody battle-strife,
Let me die as I have lived,
On the sea."

海王の水葬

(一)

【譯】

『わが力頓みに衰へ行く』。
海王は部下に語りぬ。
『海上に雄飛すること叶ふまじ
天晴の征服者としては、また。
されどわが血管に生命の血しほ
一滴だに存するひまに
床よりわれを起せ、やよ、起せ
わが頭に冠を着けよ
わが手に劍を持たしめよ
かくして伴へや我を荒磯へ。
そこに我船はかゝれり
堂々と。

血汐花さく戰の場に
わが生を終ることかなはずば
死なしめよ今日までも住みならはせる
海の上にて』。

【註】 **like a conqueror**「勝利を得て堂々と海を航した昔日の勝利者に似合はしく」。

like..... たかゝる場合には「.....の如くに」と譯すべからず。 類例:—

A:—"He gave 1,000,000 yen to the funds."

B:—"That's like him."

A:— (彼の人は百萬圓寄付したよ)。 B:— (さすがはあの人だけあるね)。

a drop remains of the life-blood は a drop of the life-blood remains と措き更へて見て可なり。

to ride at anchor「碇泊する」、「船が繫る」。

my good sword = my *trusty* sword「我が役に立つ佩刀」の意

II.

They have raised King Balder up,
Put his crown upon his head;
They have sheath'd his limbs (límz) in mail,
And the purple o'er him spread (spred),

And amid the greeting rude
Of a gathering multitude,
Borne him slowly to the shore—
(8)All the energy of yore
(9)From his dim eyes flashing forth—
(10)Old sea-lion of the North ;—
(11)As he looked upon his ship
(12)Riding free.
And on his forehead (fōr′ed) pale
Felt the cold refreshing gale,
And heard the welcome sound
Of the sea.

(二)

【譯】

彼等はボールダ王を起たしめぬ。
　彼の頭に冠を載せぬ。
彼等は彼の五體を鎧に包み
　紫の外衣もて其の上を被へり。
かくて集ひ來れる群衆の
野性を帶びたる挨拶の裡に
徐ろに彼を岸邊にと擔ひ去りぬ—
(10)北國海上の老獅
(12)彼が自由に浮べる己が船に(11)眼を放つとき
(8)彼の精力は昔日のまゝに

かすめる彼の眼より
　(9)迸り出でぬ。
青ざめし彼の額に
冷かに快き風をうけて
海よりは歡迎の
　響を聽けり。

【註】 **Bal′der** ノースメンの常に使用した名で prince の意味である。

to sheathe「包む；藏める」。又「刀を鞘に納める」を to *sheathe* a sword と云ふ。

purple「紫の着衣」で王の標である。

of yore「古の」。

dim eyes「かすんでゆく眼」。

III.

"Hurra (hoor-rä′) ! for mighty Balder !
　As he lived, so he will die !
Hurra ! hurra ! for Balder ! "
　Said the crowd as he went by.
"He will perish on the wave,
Like the old Vikinger brave ;
And in high Valhalla's halls
Hold eternal festivals ;
And drink the blood-red draught
None but heroes ever quaff'd.

With Odin and the spirits
Of the free.
In the fire, or in the wreck,
He will die upon the deck,
And be buried like a monarch
Of the sea.

（三）

【譯】

『讃めよ！偉大なるボールダ王！
生ける時偉大なりし彼れ死ぬるにも偉いなり
讃めよ！々々々！ボールダ王！』
彼の過ぎ行くとき群衆は云へり
『彼は浪の上にて死なむ
さすがに勇ましきヴァイキングルに似合はしく。
而してヴァルハラの高樓の中にて
永久のうたけを催すらむ、
血よりも紅き酒を飯まむ
英雄ならで飲みし者なき此酒を
オディンと共に、自由なる精靈と共に
飲まむ。

火災起るも暴風雨に遇ふも
彼は甲板の上にて死なむ
而して海の君主に相應しく
葬られなむ。

【註】 **Vikinger**＝viking.

as he lived, so he will die「これまで花々しく生きて來たが死ぬ時も亦花々しく死ぬことであらう」の意。

Valhalla's halls 戰歿者の靈魂の永住する宮殿。これはスカンヂナヴィアンが天に對して有して居た觀念であつた。

to hold a festival「宴會を催す」。

Odin ノースメンの主神で戰勝の神と思はれてゐた。"All-Father" とも呼ばれる。

none but heroes「英雄以外に何人も……せぬ」。

IV.

Old Balder heard their shouts
As they bore him to the beach;
And his fading eye grew bright
With the eloquence of speech,
(5)As he heard the mighty roar
(6)Of the people on the shore,
(7)And the trumpets pealing round
(8)With a bold trumphal sound,

(9)And saw the flags afar
(10)Of a hundred ships of war,
(11)That were riding in the harbour
(12)Gallantly.
And said Balder to his men—
And his pale cheek flush'd again—
"I have lived, and I will die
On the sea."

(四)

【譯】

老いたるボールダは彼等の叫びを聽きぬ。
彼等が彼を濱邊に搬ぶ道すがら。
かくて曇りゆく彼れの眼も輝りまさりぬ
千萬の言の葉をこゝにこめて、
(5.6)岸邊の人のどよめきの聲や
(8)勇ましの勝軍の響をこめて鳴り渡る
(7)喇叭の音を聞きしとき、(5)
(12)または堂々と
(11)港にかゝれる百千の戰艦の
(9)旗を遙かに望みしとき(5)。
かくてボールダは部下に云へり—
蒼白の彼の頰は再び紅を呈しぬ—

「われは生きぬ(海の上に)、而してわれは死なむ
海の上にて。

【註】 **fading eye**「段々とかすんで行く眼」。
with the eloquence of speech「目に雄辯ほどに言はせて」。
pealing round「四方へ響き渡る」。
flags afar = flags in the distance「遠方の旗」。

V.

They have borne him to the ship
With a slow and solemn tread(trĕd);
They have placed him on the deck
With his crown upon his head,
Where he sat as on a throne;
And have left him there alone,
With his anchor ready weigh'd,
(8)And the snowy sails displayed
(9)To the favouring wind, once more
(10)Blowing freshly from the shore;
And have bidden him farewell
Tenderly;
Saying, "King of mighty men,
We shall meet thee yet again,
In Valhalla, with the monarchs
Of the sea."

（五）

【譯】

彼等は步武肅々と
　　ボールダを船に運びぬ
彼等は冠を着けし彼を
　　甲板の上に横へぬ。
玉座に在るごとく彼は此處に坐せり。
彼一人船に殘して碇を揚げぬ
(8)雪の如き白帆は
(10)岸より强く吹き送る
(9)順風に孕みぬ(8)
彼等はかく云ひてわかれを告げぬ
　　懇ろに。
『猛き人々の王よ
ヴアルハラにて再び會ひまつらん、併せて又
　　他の海王にも』。

【註】 **with a slow and solemn tread**「徐ろに嚴肅な足取りで」。

favouring wind「順風」。

where he sat as on a throne「其處に彼は恰も玉座に居るかの樣に坐つた」。

to weigh anchor「碇錨を上げる」。

snowy sails displayed to……「雪の樣に白い帆が……に向つて開いた」。

to bid……farewell「……に別れを告げる」。

VI.

Underneath him in the hold
　　They had placed the lighted brand:
And the fire was burning slow
　　As the vessel from the land,
Like a stag-hound from the slips,
Darted forth from out the ships;—
There was music in her sail
As it swell'd before the gale,
And a dashing at her prow
　　As it cleft the waves below,
And the good ship sped along,
　　Scudding free.
　　As on many a battle morn
　　In her time she had been borne,
To struggle, and to conquer
　　On the sea.

（六）

【譯】

彼の下なる船艙の中に
　　彼等は炬火（たいまつ）を點しおきぬ。

火は徐ろに燃えつゝありき。
　陸を離れし海王の船が
數多漂ふ船の間より
脫兎の如く漕ぎ出づるとき
帆は强風を孕んで
樂音の響あり
水を劈く船首は鏗々と鳴る。
かくして海王の船は追風を受けて
　　波上を飛べり。
想ひ見る、出陣の晨幾度か
曾て此船の漕ぎ出されし雄姿、
闘って、而して、勝ちにけりな
　　海の上にて。

【註】 **astag-hound from the slips**「綱を解かれし鹿狩の犬」本文には意譯せり。

before the gale「强風の前に」は「强風を受けて」。

VII.

And the King with sudden strength
　Started up, and paced the deck,
With his good sword for his staff,
　And his robe around his neck ;—
Once alone, he waved his hand
To the people on the land ;—
And with shout and joyous cry

Once again they made reply,
Till the loud exulting cheer
Sounded faintly on his ear ;
For the gale was o'er him blowing,
　　Fresh and free.
And ere yet an hour had pass'd,
He was driven before the blast,
And a storm was on his path,
　　On the sea.

(七)

【譯】

海王は遽かに力を得て
　つと立上り甲板を歩みぬ、
刀を杖に
　衣は頸に纏ひて
陸上の人々に向つて
手を振れば
歡呼の聲を張り上げて
これに應ふ。
遂に聲高の喜びの叫びは
彼の耳に幽かに響きぬ、
風は强く彼の頭上を
　　吹き渡りて遮るものなければ。
かくて一時も經たぬ間に

彼は强風に吹き流されぬ。
暴風雨(あらし)は殺到せり
海の上に。

【註】 **to start up**=to spring up「立ち上がる」。
for his staff「杖の代用として」。
exulting cheer「大聲の喜びの叫び」。
ere=before.
with sudden strength「急に力付いて」。
once alone「只一遍」。
once again (once *and* again) 「重れて、繰返して」。

VIII.

And still upon the deck,
While the storm about him rent,
King Balder paced about
Till his failing strength was spent.
Then he stopped awhile to rest—
Crossed his hands upon his breast,
And look'd upward to the sky,
With a dim but dauntless eye;
And heard the tall mast creak,
And the fitful tempest speak
Shrill and fierce, to the billows
Rushing free;
And within himself he said,

"I am coming, oh, ye dead!
To join you in Valhalla,
O'er the sea.

(八)

【譯】
嘯(うそぶ)く暴風(あらし)に吹き洒(さら)されつ
なほもボールダ王は甲板の上に
歩を運べりしも
衰へゆく力は遂に盡き果てぬ。
彼は止まりて暫し憩ひぬ—
胸の上に兩手を組み
空を仰げり
朧ろなる、されど憂なけなる眼もて、
彼は聞きぬ、高きマストの軋る音
小絶えては吹く大暴風の語る聲
甲高に烈しく(語る)對手の大浪は
焔々として千里を馳す。
彼は胸の中にて云へるやう
『おゝ汝、死せる人々よ、われは來つるぞ
ヴァルハラにて汝等に會はんため
海を渡りて』。

【註】 **rent**「rend (碎くる、折れる)」の過去)」。

dauntless eyes「恐ろしいものはないと敢へて屈せぬ眼付」。

within himself 口へは出さず「腹の中で」。

to pace about「コツコツ歩く」。

a while＝for a while「一寸の間」。

shrill and fierce は shrilly and fiercely とあるべき筈なれど詩故にかくせり。

IX.

"So blow, ye tempest—blow,
And my spirit shall not quail(kwāl),
I have fought with many a foe;—
I have weather'd many a gale;
And in this hour of death,
Ere I yield my fleeting breath—
Ere the fire now burning slow
Shall come rushing from below,
And this worn and wasted frame
Be devoted to the flame—
I will raise my voice in triumph,
Singing free;—
To the great all-father's home
I am driving through the foam,
I am sailing to Valhalla,
O'er the sea.

(九)

【譯】

「されば吹けよ、暴風、吹けよ、
わが魂ために怖ぢず。
われは幾多の敵と戰へり、
われ幾度か恙なく暴風を凌ぎぬ。
而して今はの此の際に
せはしき呼吸の絶えぬ間に
今徐ろに燃ゆる火の
下より強く吹き出で、
萎え衰へし此のむくろ
焔の前に供へられぬ間に
意氣揚々と聲張りあげん
心のまゝに歌ひつゝ
偉いなるわが父君のいます許へと
水泡を分けてわれ進むなり
ヴァルハラ指してわれ走るなり
海を渡りて。

【註】 **to quail** (kwāl)「恐れる」、「死ぬ」。

to weather「難を冒して進む」、「風に抗して進む」。

to yield the breath「呼吸絶える」。尙 to yield up the ghost, the life などゝも云ふ。

All-Father Odin のこと。

many a foe＝many foes「多數の敵」。

this worn and wasted frame「此の痩せ衰へたる身體」。frame は「骨骼」の意にして骨骼は身體の主要部なる故身體全部を表はす。

to be devoted to.....「.....に供へられる; .....に捧げられる」。

X.

"So, blow, ye stormy winds—
And ye flames ascend on high;—
In the easy, idle bed
Let the slave and coward die!
But give me the driving keel,
Clang of shields and flashing steel;—
Or my foot on foreign ground
With my enemies around!
Happy, happy, thus I'd yield,
On the deck or in the field,
My last breath, shouting,
On to Victory.
"But since this has been denied,
They shall say that I have died
Without flinching, like a monarch
Of the sea."

(十)

【譯】

『されば、吹け、狂へる風よ、

さては火焔よ、高く騰れ—
奴隷や臆病者共は
安閑と手を拱いて褥中に死ぬに任せん
されども我れは擇ばん浪を劈く船か、
盾鏘然と鳴り、劍閃々と光るところか、
はたまた、外國に足踏み入れて
右も左も敵兵共に圍まれて(死なんことを)。
樂し、樂し、かくてわれは瞑目せん
甲板の上に、はた戰場に
息の根の續かむ限り叱咤しつゝ
『進め進め!』と。
『されど此願叶はぬからは
後の世までの語り草にせよや
我れは死ねり、いさぎよく
げに海王に相應はしく』と。

【註】 **blow.....ascend** —— は「.....よ吹かば吹け、——よ騰らば騰れ」の意。

Let.....die ——「.....などは —— の狀態で死ぬもよからう」。

But give me.....「されども我れには.....を與へよ＝我れは.....を擇み取る」。

Clang.....steel は戰場の光景。

on the deck or in the field *on the deck* の方は前

の *driving keel* (疾走する船)に照應し、*in the field* は後の Clang of.....steel に對す。

They shall say.....「彼等(＝世人)に.....と云はせるぞ」三人稱(he, she, it, they)の後の shall は注意を要す。尙、129 頁を參照せよ。

XI.

And Balder spake no more,
　　And no sound escaped his lip;—
And he look'd, yet scarcely saw
　　The destruction of his ship;
Nor the fleet sparks mounting high,
Nor the glare upon the sky;—
Scarcely heard the billows dash,
Nor the burning timber crash;—
Scrcely felt the scorching heat
　　That was gathering at his feet,
Nor the fierce flames mounting o'er him
　　Greedily.

　　But the life was in him yet,
　　And the courage to forget
All his pain, in his triumph
　　On the sea.

(十一)

【譯】

かくてボールダは口をつぐみぬ、

　　何等の響も彼の唇より洩れず—
　彼眼見ひらけど己が船の
　　破滅も見えず、
　また高く立ち騰る焰の舌も
　空のかゞやきも見えず—
　打つ大浪も
　燃ゆる船材の碎くる音も聞えず。
　脚下に迫る
　焦るが如き熱さも覺えず。
また彼の頭上を燃えゆく恐ろしの焰をも
　　あなや彼を呑まむとするに、
　されどなほ彼の中には生命あり、
　海の上を意氣揚々と
凡ての苦痛を打ちわすゝ
　　勇氣ありき。

【註】**spake** spoke の古い形。

No sound escaped his lips「何等の音も彼の唇から逃れ出なかつた」即ち「何も言はなかつた」。

gathering「集まる、迫る」。刻々日が暮れて行くときに gathering darkness など云ふ。

fleet sparks「非常な速度で舞ひ騰る燃木の斷片」。

greedily「慾張ったやうに」とは「飽くことを知らざる餓鬼のやうに人を啖はむとして」の意。

XII.

Once alone a cry arose,

Half of anguish, half of pride,
As he sprang upon his feet,
With the flames on every side.
"I am coming!" said the king,
"Where the swords and bucklers ring—
Where the warrior lives again
With the souls of mighty men—
Where the weary find repose,
And the red wine ever flows;—
I am coming, great All-Father,
Unto thee!
Unto Odin, unto Thor,
And the strong true hearts of yore—
I am coming to Valhalla,
O'er the sea."

Charles Mackay.

（十二）

【譯】

忽ち起る叫聲
半ばは苦しみ、半ばは誇り
彼突と起ち上りしとき
焔に取圍まれて
『われ來りぬ』王は云へり、
『劍楯の鳴り響くところ、
武士の、英邁なりし人々の

御魂と共に再び住むところ—
疲れしものは休息を求め
赤酒は常に溢るところ—
われは來ぬるぞ汝がみ許に
偉いなる父君!
オヂンの許に、ソールの許に
古への忠實なりし勇士のみ魂の許に
われは來ぬるぞ海を超えて
ヴァルハラに』。

【註】 **to spring on one's feet**「がばと跳ね起きる」。
bucklers＝shields「楯」。
Thor「ノールス人の崇める軍の神、雷神、農業の神で、オディンの子である」。
the weary「疲れたる人々」。
Charles Mackay スコットランドの有名な詩人で千八百十四年に生れて千八百八十九年に死んだ。其の詩の中で最も知られてゐるのは "There's a Good Time Coming" 及び "Cheer, Boy's, Cheer" である。

上掲の詩篇も此人の作にして、文字雄渾 Balder の壯烈なる最後巧に寫し出されたり、譯文は可成原文のまゝに直譯したる爲め歌としての味を出す事は不十分なりし憾あり、中にて原文と譯文との順序余りに一致せぬ箇所は番號を附したれば行を辿つて原文譯文を對照すれば意味は解し易かるべし。

CHAPTER IV.

Alfred's Boyhood

アルフレッドの幼時

The Danes had conquered Northumbria, and had overrun the midland and eastern parts of the country when Alfred was born. He is the only ruler amongst all the sovereigns (sŭv′răn) of our country who is known by the proud title of "The Great." By his own people he was often spoken of as "Alfred the Truthteller," and sometimes as "Alfred England's Comfort," because of the peace which his reign finally gave the country.

構文解說

The Danes { **had conquered**..... / and / **had overrun**—— } *when*

Alfred was born.

Alfred was born といふ事實の起りし時は既に The Danes が.....を conquer し、——を overrun

したる後なりしこと *had* conquered, *had* overrun と had を添へたる大過去形にて示されあるに注意せよ。

He is the only ruler (.....) who is known by——

who 以下は ruler に附屬する形容句 (Adjective Clause) にして此處を直譯すれば「彼は、——として知られて居る唯一の君主である」となる、之を下の譯文の如くして差支なき理由は註釋の部にて學ぶべし。

By his own people **he was often spoken of** as——

=**His own people** often **spoke of him** as——

「彼れの治下の民によつて彼れは屢々——と呼ばれた」。

=「彼の治下の民は彼を屢々——と呼んだ」。

【譯】 デーン人がノーサンブリアを征伏し、英國の中部、並びに、東部地方を蹂躙した頃ほひにアルフレドは生れた。我國古來の帝王中、『大王』といふ堂々たる稱號で人に知られて居る君主は彼れの他にない。治下の民は屢々彼れを『正直王アルフレッド』と呼び、又、時としては『英國の

慰安アルフレッド』とも呼んだ、それは彼れの統治の力が〔當初の困難を凌ぎ切つて〕遂に其國に太平を與へたからである。

【註】 **He is the only ruler** (.....) **who is known** ——「彼は——として知られたる唯一の統治者である」=「——として知られて居る統治者は他にはない」。

類例:—

それが出來るのは彼の人の他にない。
=彼の人はそれが出來る唯一の人である。
He is *the only* person who can do that.

is known by——「——で知られて居る; ——で通つて居る」。例:—

He *is known by* the pen name of "Chogyū."
彼は"樗牛"といふ雅號で知られて居る。

was spoken of as——=was called *as*——「——と呼ばれた」。

because of.....「.....のために; .....だから」。

比較:—

(*a*) ....., *because of* the peace which his reign finally gave the country.
(*b*) ....., *because* his reign finally gave peace to the country.

(*a*) も (*b*) も表はす意味は相同じ、唯、構造上 (*a*) の場合には後に名詞(上の peace) 來り、(*b*) にては Clause (上の his reign より country まで) を措くの差あるのみ。而して、(*a*) の形は普通の邦語に寫し難き故 (*b*) の形より譯せり。尙一例を參考に供せん:—

(*a*) I could not come *because of* the rain which kept on pouring all day long.
(私は來られなかつた、一日中降りつゞけた雨の爲めに)。

(*b*) I could not come *because* rain kept on pouring all day long.
(私は來られなかつた、雨が一日中降りつゞいた爲めに)。

finally=at last 此文字あれば「最初は困難であつたが」の意を含む。例へば:—

He *finally* succeeded in the invention. は(彼は遂にその發明に成功せり) にても事足れども「困苦して遂に」と補ひ譯する方更によし。

His birth took place at Wantage, a village or small town in Berkshire, in the year 849. Wessex had then extended its borders and included the under-kingdoms of Sussex and Kent. It, therefore, stretched from the present Devonshire to the sea-coast of Kent, and from the English Cannel to the Thames. Its kings had several palaces (pălˈăsĭz) in different parts of their domains, and spent some part of their time at each.

At Wantage, the people still point out the site of the ancient palace in the "High Garden," and here, it is said, Alfred was born. He was the fourth and youngest son of Ethelwulf the King of the West Saxons. His mother's name was Osberga, and she was the daughter of the King's cup-bearer, or butler, a man of royal descent (dē-sent').

【譯】 彼は八百四十九年にバークシヤの——村といふよりは——小さな町のウォンテーヂといふ所で生れた。 當時ウェセックスは境界今よりも廣きに渉り、サセックス及びケント等の屬國を併有して居した。 卽ち今のデヴォンシヤからケントの海岸迄と、英吉利海峽からテムズ河に亘つて居たのである。 其の國王方はその領内の諸所に數多の宮殿を所有し、あなた、こなたの宮殿に移り住んで居た。 ウォンテーヂへ行つて見ると土地の人は今でも「高園」中の古宮殿の舊趾を指し示して呉れるが、此處でアルフレッドは生れたと云ふことである。 彼は西サクソンの國王エセルウルフの第四子で且つ季子であつた。 母の名はオスベルガと云ひ國王の管酒吏(カプベアラ)を務めて居た者の娘でその父も王家の血を承けた人であった。

【註】 **His birth took place** *at*..... = He was born *at*.....

under-kindom「從屬せる王國」。

to point out「指摘する」。

a man of royal descent「高貴の人の血統の人」。

at each の次に palace を補ひて解すべし。

Site「敷地」、「舊跡」。

butler「王侯貴人の館で酒類を管する者」。 今は此語を「僕婢の長」の意に用ふること多けれど、古き用法にては (Bible の如き) 皆「管酒吏」なり。

We know very little about the boyhood of Alfred, but we get a glimpse of his early days in the "Life of Alfred," written by Asser, who, as you have already learnt, was invited to the Court by Alfred when he became King.

構文解說

1. **We get a glimpse of his early days**
2. in the "Life of Alfred"
3. which was written by Asser,
4. who (.....) was —Alfred
5. when he became King.

1. は主部で 2. は、1. の行はるゝ場所を示し、3. Life of Alfred の著者を示し、4. は其著者と Alfred との關係を表はし、5. は 4. の事を起りし時を示す。

【譯】 吾々はアルフレッドの少年時代に就ては殆んど知らない。然しアッサの書いた「アルフレッド傳」の中に、彼の若い時分の事の概略を窺ふことができる。アッサと云ふのは、既に承知の如く、アルフレッドが國王にに成られた時に宮中に招かれた人である。

【註】 **We know very little** *about*……「……のことは碌々分らぬ」。

get a glimpse of……「……を一寸見る；……を瞥見する」。

He there tells us that Alfred "was loved by his father and mother, and even by all the people, above all his brothers, and was educated altogether at the Court of the King. As he advanced through the years of infancy and youth, his form appeared more comely (kum'lĭ) than that of his brothers; in look, in speech, and in manners he was more graceful than they. His noble nature implanted in him from his cradle a love of wisdom above all things.

構文解說

Alfred { **was loved** + { by…people—愛して呉れた人々 / above…brothers—愛された度合 } *and* **was educated** + altogether……King——教育された場所 }

His noble nature implanted { in him——implant した場所 / from the cradle——implant し始めた時 } **a love of wisdom** above all things.

【譯】 彼は其の書中に語るらく『アルフレッドは父母からも、又、國民のあらゆる者からさへ、兄弟の誰よりも多く愛された。そして全然宮廷中で教育を受けた。彼が、幼年時代、少年時代、と段々年を經て來るに從つて彼の容姿は兄弟達に優れて益々よくなつて來た。面貌に於ても、言語に於ても、容儀に於ても、彼は兄弟達より更に溫雅であつた。彼の氣高い性質は、其の搖籃の頃から、何よりも殊に知識を愛すると云ふ心を彼に植え付けたのである』。

【註】 **there** は「彼が書いた本の中に」の意。

above all……「……の總べてに勝りて」。

comely「容姿のいゝ」。

graceful「氣品ある」。

to implant「植えつける」。 此語を用ふる時は implant (……を) in (——へ) の形を取る、上文にては (——へ)の方、先きに出たるなり。

altogether「全然」。

his form「彼の容姿」。

from his cradle「搖籃の時代から」即ち「赤兒の時から」。 序ながら「生れてから死ぬ迄」を "from cradle to grave" と云ふ。

There is a story told which shows that Alfred did really desire to learn. It is said that one day his mother, perhaps wishing that her sons should be able to read, took out a book of Saxon poetry and showed it to them. Now there were no printed books in those days, nor indeed for hundreds of years afterwards. But a few of the Saxons were very beautiful writers, and by them the books were copied. They were, of course, very rare and very costly.

構文解說

his mother, [perhaps wishing that her sons should be able to read, **took out a book of Saxon poetry and showed it to them.**

上文中普通字にて印刷せる部分は黑文字にて印刷せる事柄を母君が行ひ給ひし時の希望を示す、之を後方へ回して perhaps *because* she wished that her sons should be able to read としても大差なし。

【譯】 アルフレッドが眞實に學問をしたいと望んで居たことを證明する一條の物語がある。 或日彼の母が、多分子供等を本の讀める樣にしたいものだと思つてであらう、サクソンの詩の本を一册取り出してそれを子供等に示した。 さて其の頃は印刷本などいふものはなかつた。 其の頃どころか其の後數百年の間なかつた。 ところがサクソン人の中には非常に字の巧いものがあつて、書籍は此等の人に依つて寫し取られたのである。勿論其等の書籍は極めて稀れで、又極めて高價なものであつた。

【註】 **did really desire** としたのは語勢を强める爲めで普通ならば really desired なり。

It is said that……「……と云ふことである」。

Nor indeed「否々其の頃どころか實に……の頃迄もなかつた」。

beautiful writers=good penman「能筆」。

The first letter in each chapter of this book was painted in colours with great

skill. After letting her boys look at the book, the mother said, "Whichever of you shall the soonest learn to read this volume shall have it for his own." Then Alfred, filled with a desire to possess the book, spoke up before his brothers. "Will you really give that book to him who can understand and rèpeat it to you?" he asked. His mother answered that what she had said she meant (mĕnt), and the boy borrowed the book and took it to his master, a monk from one of the abbeys near. In a short time, he learnt to recite the poems it contained, and received the book from his mother's hands.

【譯】 此の本の各章の最初の文字は極めて巧みに彩色してあつた。 子供達に本を見さして母は云つた。『お前達の中で誰でも一番先に此の本を讀める樣になつたものにこれを進げよう』。 そこでアルフレッドは其の本が欲しさに兄に先んじてかう云つた。『其の本が解つてそれを暗誦の出來る者にきつと其の本を下さいますか』。 母は自分の言葉に嘘はないと答へた。 少年は其の本を借りて近くの寺院から來て居る僧侶で師匠と仰いで

"Will you really give that book to him who can understand and repeat it to you?"—*Page 128.*

居る人の所へ持つて行つた。　僅かの間に彼は其の書中の詩を暗誦して、母人の手から其の本を頂戴した。

【註】 **was painted in colours**「種々な色に彩色してあつた」。

with great skill＝very skilfully.「巧みに」。

learn to read「讀める樣になる」。

.....shall have it＝I will give it to .....「.....は〔吾が意志によりて〕それを有つやうになるぞ」＝「吾れは.....にそれを與へる」。

二人稱 (*you*) 三人稱 (*he, she, it, they* その他名詞) の次に shall を用ゐる時はそのまゝ日本語に譯する能はず、上の如く I will の形に改めて後にすべし。

You shall have this＝*I will* give this to you. (これをお前に上げるよ)。

He shall come＝*I will* allow him to come *or I will* make him come (彼は來てよろしい、又は來させる)。

[being] **filled with a desire**「.....したくて耐らず」。

spoke up＝spoke *out*「口を切つた；言ひ出した」、「見上げて」にあらず。

what she had said she meant「自分の云つた事は本氣で言つたのだ」。

after **letting her boys look** *at the book*＝after *showing her boys* the book.「子供達に其本を見せてから」。

In a short time「僅か經つと」。

In 853, Alfred, then a very little boy, was sent to Rome. At this time, Rome was the centre of the Christian world, and there the Pope, who was called the Supreme (sūp-rēm′) Head of the Church, lived, even as he does now. Bishop Swithun took the prince, and, according to custom, carried many valuable presents as a gift to the Church. The Pope blessed Alfred, and, as some people say, anointed him, and named him the future King of the West Saxons; but this we do not know for certain.

【譯】 八百五十三年に、當時まだ小さな子供であったアルフレッドは、羅馬へ送られた。 其頃、羅馬は耶蘇教國の中心地で、そこには教會の元首と稱せられた法王が住んで居た、現今も矢張住んで居るが。 僧正スウイサンは王子を伴ひ、慣習に依りお禮の印として澤山の高價な贈物を教會へ持って行った。 法王はアルフレッドを祝福し、或る人々の云ふ所によれば、頭に膏ぬって彼を西サクソンの未來の王と命名したとのことである。 然しこのことは確かとは分らない。

【註】 **Alfred** (who was) **then a very little boy**

the Supreme Head of the Church supreme は

「至高なる」の意にして、單に "the Supreme" とすれば「神」の意となる。

Swithun 凡そ八百年に生れ八百六十二年に歿した。Swithin とも綴る。「聖スウィシン祭(七月十五日)の當日雨が降れば四十日間降る」と云ふ俗説がある。

因に英語で "四十日" は「長い」意味の代表語でノアの大洪水の雨、基督の荒野の試錬皆四十日である。

even as he does now=just as the Pope lives (*even* =just)「今も住んでゐる樣に」。

according to.....「.....に從つて」。

to anoint「儀式であぶらを塗ること」。 これは原と猶太の習俗にて、王者たり、又は祭司たる儀式にて必ずその人の頭に膏を塗りたるなり、*Isaiah* (イザヤ)は The Lord *hath anointed* me to preach. (神は我に膏ぬりて説教者の資格を與へ給へり) といひ、猶太最初の王 *Saul* も Samuel に膏ぬられて正式の王たる資格を得たり。

for certain=certainly「確かに」。

Two years later, in 855, King Ethelwulf himself arrived at the Holy City, and in the next year father and son began their return journey. Their route (rōōt) lay across the country now called France, and at the Court of the Emperor Charles, they stayed awhile. Here Ethelwulf married Judith, the young daughter of the Emperor, no doubt, with the object of gaining a strong ally.

【譯】 二年の後、八百五十五年にエセルウルフ王自身「神聖の町〔なる羅馬〕」に來着された。 そして其の翌年父子は歸國の途に就いた。 道筋は、今佛蘭西と呼ばれて居る國を横切ることになつて居て、彼等は暫らくチャールズ皇帝の宮庭に止まった。 此處でエセルウルフは皇帝の乙の姫のジュディスと結婚した、無論、强固な味方を得ようとしてである。

【註】 **their route lay across**.....「順路は.....を過ぎって居た」=「.....を通って行くわけであつた」。

with the object of.....「.....を目的として」。

On reaching home, they found that Ethelbald, Alfred's eldest living brother, with certain thanes of noblemen, had formed a league (lēg) against the old King, and had resolved not to allow him to return to his power.

【譯】 歸國して見ると、今ではアルフレドの一番上の兄になて居るエセルバルドが、或る貴族達と徒黨を組んで父王に反抗し、父王が戻つて來ても、最早王とは認めまいと決め込むで居た。

【註】 **living** の文字ある故、尙その上に兄ありしもその長兄が死去したること分る、譯には「今では.....になって居る」とせり。

to form a league against.....「.....に抗して徒黨を組む」=「徒黨して.....に反抗す」。

resolved.....「どうしても.....する」。

not to allow him to return to his power=not to acknowledge him as King any longer「父がその權力(=王位)に復歸する(不在であつた後)を容さない」=「もう父を王として認容せぬ」。

Ethelwulf, rather than cause strife in the land, and possibly wishing to live the rest of his days in peace, agreed that Ethelbald should be King, while he took the title of King of Kent. He died about two years afterwards.

構文解說

Ethelwulf { rather than cause.....land / *and* / wishing to live.....in peace }

agreed that Ethelbald should be King,

while

he took the title of.....Kent.

【譯】 エセルウルフは强ひて國内に爭鬪を釀す樣なことはせず、そして、恐らくは餘生を平安に暮らし度いと思つてか、エセルバルドの國王たる

ことを承認し、自分はケント國王の稱號を取った。彼は凡そ二年の後に歿した。

【註】 **rather than**……「……よりは寧ろ」=「……を好まずして」。

cause strife「爭鬪を惹起す」。

the rest of his days「彼の生涯の殘餘」=「殘生;晩年」。

live in peace「平安に暮す」。

And now comes a great gap in the records of the life of Alfred. Until he had reached the age of nineteen we know very little about him.

【譯】 偖て此處まで來るとアルフレッドの傳記中に大變抜けて居る所が出て來る。 彼が十九歳に達する迄は彼に關する事は殆んど分らない。

【註】 **gap**「穴」「間隙」。

we know very little about him = *Nothing is known* to us about him.「彼の事に就て何にも分らない」。

It is certain that Alfred's early education consisted mainly in learning to repeat parts of the Bible, Prayers, religious Poems, and Songs of the Minstrels. For in after years, he said that his greatest difficulty had

been, that in his youth, when he could have learned, "he could find no teachers; for there were none at that time, in all the Kingdom of the West Saxons."

構文解說

his greatest difficulty had been that

in his youth——find no teachers の時日を示す

when he……learned —— youth が如何なる時期なるかを示す

he could find no teachers

【譯】 アルフレッドの幼い頃の教育は主として聖書や禱りの文句や、宗教詩や、伶人の歌詞を讀誦することにあったことは確かである。 何故なれば彼は後年かう云ふことを云った。『彼が最も困難と思ったことは、其の少年時代、學問をすれば出來る時代に、先生が見付からなかったことであった。 ナニシロ其の時代には西サクソン王國の隅から隅を探しても、先生なぞは一人も居なかったのだから』。

【註】 **It is certain** *that*……「……は確かである」(48頁構文欄參照)。

……**consists in** ——「……は——にあり」。 比較:—

(*a*) An army *consists of* soldiers and arms. (軍隊は兵員と武器とで成立つ)。

(*b*) The efficiency (エフィシェンスィ) of an army *consists in* its discipline (ディシプリン) and morale (モラール). (軍隊の能力はその訓練と士氣とに存す)。

prayers 羅馬教又は英國々教に於いては祈禱の文言一定し居りて、之を暗記するやうになり居るなり。 因に、prayer「祈禱」の意なる時 *prâr* と一音節にして、「祈禱者」の意なる時は *pray'er* と二音節となる。

he could have learned (*if he had had a teacher*「(先生があつたなら)學ぶことが出來たであらう頃に」。

In the long winter evenings it was the custom of the minstrels or "gleemen" to visit the houses of the rich, and after the evening meal, to entertain the company by reciting poems of valiant deeds, or singing them to the music of their harps. The boy Alfred, no doubt listened to these with great attention and probably long retained them in his memory. Alfred also learned to play upon the harp and to sing the songs himself. So well did he play and sing, that tradition says he was able, in after years, to go into the camp of the Danes, disguised as a minstrel, and whilst he amused them, to notice their arrangements and find out their plans.

構文解說

it **was the custom of.....gleeman**
to visit the houses of the rich
and (after the evening meal)
to entertain the company
by { reciting.....deeds / singing them to.....harps }

冒頭の it は to visit..... と to entertain..... 二ツの Noun Phrases を代表するものにして、之を:—

to visit.....the rich and *to entertain* the company by.....harps *was the custom of*.....*gleeman*.

と順序を逆に排置すれば *it* は無用となる、然れども、前にも說明せる如く頭大尾小には英語にて厭ふところある故、it にて始め、to..... を後へまはす方をよしとす。

(after .....) は下の entertain の時を示し、by { ..... / ..... } の部分は entertain の方法を示す。

【譯】 冬の夜長に、富豪の家々を訪問し、夕餐の後で武功の詩を讀誦し、また、それを立琴の樂に合はして歌って一同を娛ませることは伶人卽ち樂人の常習とするところであった。 子供のアルフレッドは、定めし一心に其の歌を聽いて、そして長くそれを記憶に止めて置いたことであらう。

アルフレッドも亦自分で、立琴を奏で、自分で歌ふことを學んだ。それは誠に巧に奏で、巧みに歌つたもので、傳說によれば、後年彼は伶人の假裝をしてデーン人の幕舍に入り込み、彼等を娛まして居る間に彼等の設備に目を配り、彼等の計畫を探知することができたと云ふことである。

【註】 **to entertain**……by——「……を饗應する——して」。

to these の次に poems を略したり。

to sing……**to**——「……を——に合はして歌ふ」。

with great attention「一心に、細心注意して」。

to retain「抑留する」。

to play upon the harp「琴を奏でる」。upon 又は on の前置詞に注意。但し、on なく用ふるも妨なし。

tradition says「傳說に曰く」。

[being] **disguised** *as*……「……に假裝して」。此語を用ふるには Passive 又は Reflexive にする要あり:—

{He disguised *himself* as a girl.
{He *was* disguised as a girl.

to find out「探知する」。

It was at this time the duty of every man to be able to fight, for there were foes on every side. We may be sure, therefore, that as soon as he was strong enough,

the boy Alfred was taught the use of arms, and he became the greatest soldier of his times. It is certain that he was diligent in the practice of them.

構文解說

To be able to fight was the duty of every man at this time.

を上の如く直して前節の說明に照會すべし。譯文は for 以下と at this time を結合して冒頭に譯出せり。

【譯】 四面楚歌の聲を聞く此の時に當つて戰に出られる樣に成る事は各人の義務とする所であつた。であるから子供のアルフレッドも相當に體格が出來てくると、早速武器の使用法を敎へられ、當代の最も勝れた武人になつたことは信ずるに足る。彼が武術を勵んだことは確かなことである。

【註】 **the use of arms**「武器の使用法」。

We may be sure……=It is probable……「……は大抵確かである」。

of his times「彼と同時代の」。times の *s* に注意。

to be diligent in……「……に勤勉である」。

the practice of them の *them* は arms を指す。

Hunting also occupied a large part of

his time, and in the pursuit (pĕrsūt') of game, with which the forests were plentifully supplied, he became very skilful.

【譯】 彼はまた狩獵に大部分の時を費した。そして森には溢れる程の獲物が居たが、そういふ獲物を追ふことに極めて上手になつた。

【註】 **occupy one's time**「時間を占める; 時間を潰す」。比較:—

All *my time is occupied* this afternoon.
I am engaged all this afternoon.
今日の午後は手があかない。

pursuit「追求すること」。

The *pursuit* of knowledge. (學問に勉むること)
The pursuit of happiness. (安樂を求めること)

等を參考せよ。

Indeed, to be able to fight fearlessly, and to hunt well, were the essential things in the training of the Saxon youth. Wherever Alfred was, he heard, day by day, the clash and clang of arms, and his blood would be stirred with thoughts of the time when he too would take his place in the fore front of the battle, and strike a blow for the freedom of his country.

【譯】 げにも大膽に戰ひ、巧みに狩することはサクソン青年の訓練には缺く可からざることであつた。何處に在つてもアルフレツドは日毎に劍戟の音鏘々たるを耳にした。そして他日自分も陣頭に立ち、母國の自由の爲めに敵に一擊を與へる時を想見して血を湧かしたものである。

【註】 **essential**「必要缺く可らざる」。

clash「武器が打ッ突かる音」。

day by day「日毎に」。

wherever Alfred was「彼處に行つても到る處で」。

his blood would be stirred.....「.....な事を思ふと血が動き出す、血が湧く即ち興奮する」。stir が過去形になる時末尾の r を重ねるに注意。

to take one's place in.....「.....に出場する」。

to strike a blow = *give* a blow「一擊を喰はせる」。

And so he joined heartily in the hunting expedi'tions and in the rough (rŭf) and tumble games of the times, making his muscles(mu'slz) strong, his eyesight keen, and his brain alert, all the while preparing for the fight to come. Stories of the landing of fresh parties of the Danes were constantly arriving, and sometimes the news of victory gained would be a cause of

rejoicing, whilist dēfeat′ would cause them to turn again to their arms and make ready to do their part.

【譯】 それ故に彼は喜んで遠出の狩獵や、時代相應の冒險に加はり、筋骨を鍛え視力を鋭くし、頭腦を敏活しにし、絶えず將來の戰爭に備へて居た。 デーン人の新手が上陸したと云ふ噂は絶えず傳へられ、時々は味方勝利といふ報知を聞いては喜びもしたが、之に反して負けたことを耳にすればまたもや武器を取つて自分等の役目を果す準備をするのであつた。

【註】 **heartily**＝willingly「喜んで、自ら進んで」。
rough and tumble＝*reckless*「向ふ見ずな」。
alert＝watchful, active「注意深い」、「活動的なる」。
to be *on the alert*「警戒してゐる」。
to make ready＝to prepare「用意する」。
to do one's part「自己の役目を遂げる、自己のやるべきことをやる」。

Saxon nobles had little learning, for much learning was not thought necessary, the mónks being the only persons who could read and write, or who took an interest in books. Alfred was already in his teens before he was able to read, and

it was not until later years, when the king in his wisdom saw that knowledge was better than laws that learning began to be prized.

【譯】 サクソンの貴族連には殆んど學識なぞはなかった、と云ふ譯は、澤山學問があることは必要と考へられなかったからで、讀書きができ、書籍に興味を有つものとては僅かに僧侶等があるのみであった。 アルフレッドはもう十四五といふ年配だったのに、まだ本を讀むことは出來なかった。そして後年、王が賢くも、知識は法律よりもよいと云ふことを覺って、それからやうやく學問が重んぜられる樣になったのである。

【註】 **to take interest in**……「……に興味を覺える」。
Alfred was already in his teens *before he was able to read*＝アルフレッドは已に十四五歳になつて居た、彼が讀むことの出來た前に(before)」＝「彼が讀むことの出來ぬうちに(before)、もはやアルフレッドは十四五歳になつて居た」＝「アルフレッドはもう十四五歳になつたのにまだ彼れは本が讀めなかつた＝Alfred was now in his teens *and yet* he was *not* able to read.
in his teens「十三より十九歳に至る間」なれど「十代」位に譯して可。

it was not until.....*that learning began to be prized*「.....迄は學問が重んぜられなかつたが」=「.....になつて始めて.....した」=it was *only when*.....that learning .....

in his wisdom=wisely「賢明にも」。

to be prized「重んぜられる」。

At the age of nineteen, Alfred was married to Ethelswitha, the sister of Burhred, King of Mercia. Asser tells the story of his wedding at some length. Large numbers of people assembled to take part in the marriage feasts, which were kept for several nights and days. All at once, in the midst of the festivities, Alfred was seized, in the presence of all the people, with a sudden and overwhelming pain. None of the doctors could tell what was the matter with him; indeed, though the disease (diz-ēz′) which then came upon him lasted almost until his death, no one could tell what it was.

【譯】十九の歳にアルフレッドはメルシアの國王バーレッドの妹のエセルワイザと結婚した。アッサは彼の結婚式に就て可成り長い話を書いて居る。彼の婚禮の宴會に參加する爲め集まる

た人は無慮幾千であつた。宴會は數日の間晝夜打ち續いた。宴酣の頃、衆人稠座の中でアルフレッドは急劇で、とても我慢の出來ない苦痛に襲はれた。どの醫者にもどうした譯なのか分らなかった。いやそれどころではない、其の時彼を襲ふた病氣は殆んど彼が死ぬ迄續いたのであるが、それでも、それが何の病氣であったか、誰にも分らなかったのである。

【註】.....**was married to**——「.....が——と結婚した」。marry といふ動詞を受身に用ふる事邦語の「結婚する」といふ語法と異る。例:—

He *was married* to Tomoye.（彼は巴を娶れり）。

at some length「稍長く」。

to take part in.....「.....に仲間入りをする」。

all at once「突然」。

in the midst of.....=at the height of.....「.....の最中に; .....闌の頃」。

to be seized with.....「.....に襲はれる」。

in the presence of.....「.....の居る前で」。

overwhelming=unbearable「我慢の出來ぬ」。

what was the matter with him=what was the trouble with him「彼れの故障は何であつたか」。

came upon.....「.....を襲ふた」。

Hear what Asser says about it. "But

if ever by God's mercy, he was relieved from his infirmity for a single day or night, yet the fear and dread of that dreadful malady never left him, but made him almost useless, as he thought, for every duty, whether human or divine."

【譯】 アッサがそれに就て云ふ所を聞け。『假令、神の惠みに依つて、只の一日でも一夜でも彼が其の病苦を免れたにせよ、その恐るべき病に就ての恐怖の念は決して彼を去ることなく、それが爲め人としての務めも神に對する責任も、碌に果すことは出來ないやうになつた、と彼自身は思ったのである』。

【註】 **if ever** その樣な事はあるまいが「萬が一あったとしても」。 *ever* は if の疑を强める。

to be relieved from..... 「.....から救はれる、樂になる」。 前置詞に of を用ふるを常とす。 例:—

The medicine *relieved* me *of* pain. (その藥が私の苦惱を除いた)。

infirmity 「病氣」。

the fear and dread of.....made him useless for——

「.....を恐れる念が:——をするのに役に立たぬ (useless for) やうにした (made)」。

as he thought 「彼が考へたところでは」。

duty whether human or divine 「人としての務め、はた、神に對する務め」とは、王も人間だから、一面人間に對する(即ち倫理道德上の)務があり、一面には宗教上より見て神に對する務あり、殊に神に選まれて人民の王たる上は此方面の責任も亦甚だ重し。

What the disease was we do not know. But of this we are sure, that it was such as did not show outwardly, nor did it affect his strength, weaken his courage, or impair his mind. When we read Alfred, we should keep in mind the fact that he had a constant illness, in spite of which[1] he was able to do the many noble deeds which[2] have earned the admiration, and which deserve the gratitude of Britons in all parts of the world.

構文解說

What the disease was **we do not know**

=**We do not know** what the disease was

下行の順序を本來とす、顚倒したるは what..... was の部分を强むる爲なり。

of this we are sure that.....

=we are sure *of this* that.....

順序の顚倒の理由は上に同じ、而して that 以下

は *this* を説明したる文言なり、又、*that* に率ゐらるゝ部分は下の如し:—

that { it was such [a disease] as.....outwardly
nor did it { affect his strength
weaken his courage
or
impair his mind

尚 **nor** を *and*...*not* に分析して:

and it did *not* affect his strength, weaken his courage, or impair his mind

として見れば一層分り易し

When we read of Alfred

we should keep in mind the fact

that { he had.....illness
in spite of which[1] } the fact の apposition
he was able.....deeds

which[2] (deeds を受く) { have.....admiration
and
deserve.....the world

【譯】 何と云ふ病氣であったのか吾々は知らない。 然しかういふことは確かである——それは外面には顯はれず、又力にも影響せず、元氣も弱めず、精神をも衰へさせぬものであったと云ふことは。 吾々がアルフレッドの傳記を讀む際には、銘記しなければならない、彼は絶えず病を持つて居

た、それにも拘らず、世界のあらゆる部分に於けるブリトン人の景仰するところとなり、且つその感謝に値する程の澤山の立派な功績を立てたことを。

【註】 **that it was such** a disease として見よ。

impair..... 「.....を弱める」。

read Alfred 「アルフレッドを讀む」と云はず、「アルフレッドの傳を讀む」とすべし。 類例:—

I spent most of the holidays in *reading Shakespeare* (僕は休暇の大部分をシェエークスピーアの著作を讀んで暮した)。

keep in mind 「胸に刻んで置く」。

the fact that..... 此の如き構造に於いては that 以下は the fact を説明する働をなし、之を Apppsition (詞格) といふこと前にも述べたるが、かゝる用法の that は決して省略すべからず。

in spite of..... 「.....に拘らず」。

earned..... 「.....を(勞力、功績等によりて)享受した」。 例:—

At your age you ought to *earn* your own bread. (お前位の年頃になれば自分の食扶持を稼ぐが當り前だ)。

to deserve..... 「.....に相當する; .....を受くるに足る」。

gratitude 「恩を感ずる心; 感謝」。

CHAPTER V.

The Beginning of Alfred's Fight with the Danes

アルフレッドデーン人合戰の序幕

The story of Alfred's life is the tale of one contin'uous fight with the pirates from over the sea. With the exception of a few years just before his death, there was no time when he could hang up his battle-axe and be sure that it would not very soon be wanted again.

【譯】 アルフレッドの傳記は、海を越えて來る海賊との不斷の爭鬪の物語である。彼が崩御前の數年を除く外、戰時用の斧を〔壁上に〕懸けて、もう差し當り此樣なものは要るまいと安心して居る間は寸時もなかった。

【註】 **one continuous**……「のべつに續いた……」。 **from over** *the sea*「海の彼岸から〔來る〕」。 此の如く前置詞を重用すること度々あり。 例:—

Three men were chosen *from among* the people. (その人々の中から三人選み出された)。

with the exception of……「……を除外例として」。

just before his death「彼が死ぬ一寸前」。

there was no time when……「……する樣な時がなかつた。

to hang up「引っ懸ける」◎意なれど此處では「懸けてしまつて使用しない」と云ふ言外の意味に注意。 尙、我國にて槍、長刀の類を楣間(なげし)にかけたやうに西洋では武器を壁上に懸け連ねて裝飾の一部とす。

Even before the birth of Alfred, the Danes were enemies for whom a constant watch must be kept. His grandfather, Egbert, several times fought them, as also did his father, Ethelwulf.

構文解說

the Danes were enemies

for whom (=enemies) a constant watch must be kept

for whom 以下は enemies の如何なる種類のものなるかを示す。 而して

We must keep a constant watch *for* the enemies.「吾々はその敵に對して (for) 絕えず警戒せねばならぬ (keep watch)」なば

A constant watch *must be kept for* the enemies. と變へ得ることを學び、更に 81 頁に於いて學びたる如く、日本語にては「油斷なく警備せねばならぬ敵」と形容の文句を「敵」の前へ冠らせるに反し、英語にては之を後へ附けて、‘the enemies *for whom a constant watch must be kept*” となるを會得すべし。而して、かゝる場合關係代名詞 (who, which, that) が日本語に譯されぬに注意せよ。

【譯】 まだアルフレッドが生れぬ前からデーン人は、寸時も油斷なく警備せねばならぬ敵であった。 アルフレッドの父エセルウルフのみならず、祖父エグバートも亦、幾度も幾度も彼等と戰った。

【註】 **His grandfather, Egbert,** several times **fought them,** *as also did* **his father Ethelwulf**=His grandfather, Egbert, *as well as* his father, Ethelwulf, fought them several times=*Not only* his father, Ethelwulf, *but also* his grandfather, Egbert, fought them several times.

上の三種の構造を比較して、三種同一の意味なるを學び、譯文の由來を知るべし。also *did* の did は *fought* に代れる語。

But the task which Alfred had to face was greater than that of his forefathers. In their time, the sole object of the Danes waspl under. A sudden descent upon a

defenceless place, the killing of the people, and the carrying off of the spoil before a force could be brought against them; this was all they tried to do.

【譯】 アルフレッドが男々しく引受けなければならなかつた任務は彼の祖先等のそれよりも更に大なるものであつた。 彼等の時代にはデーン人の唯一の目的は掠奪であつた。 防備のない地點を俄かに攻擊して、之れに對抗する軍勢の來ない中に、人を殺し、分捕物を運び去る——彼等が試みたのはこれ丈けのことであつた。

【註】 **face**=meet confidently or defiantly「自信を以つて(又は、傲然として)立ち對ふ」。

descent 此處では「突然の襲來」。

in their time の their は forefathers を指す。

sole=only「唯一の」。

spoil「奪掠品」。

this was all they tried to do「これが彼等がなすべく試みた總てであつた」。即ち「彼等が爲たのは怎麼事に止まつて(大して恐るべきものではなかつた)」意。

During Alfred's reign, however, their object was conquest. They had taken the greater part of the land; Wessex alone remained. The Danes did their ut'most to conquer this small part of the country,

and so make Saxon England a Danish Kingdom.

【譯】 けれどもアルフレッドの時代には彼等の目的は土地の征服であつた。 彼等は此の國の大部分を占領し、ウェセックス丈けが殘つた。 デーン人は此の小さな一地方をも征服し、サクソン英國をしてデーン王國たらしめんと全力を傾けたのである。

【註】 **their object was conquest**「彼等の目的とする所は單に奪掠ではなく更に進んで敵地を征服すると云ふことであつた」。 例:—

Alexander the Great's *conquests*. (アレクザンダ大帝の征服した邦土)。

A country divided against itself proves an easy *conquest*. (內に相鬪いて居る國は容易く征服される〔國となる〕)。

Wessex alone remained「ウエセックス丈けは占領されずに殘つた」。

to do one's utmost = to do one's best「全力を盡す」。

Ethelbert, Alfred's second brother, was now King, for all the four brothers — Ethelbald, Ethelbert, Ethelbred, and Alfred —succeeded to the throne in turn. At this time the Danes had formed a camp in the

Isle of Thanet, at the mouth of the Thames, in which they lived during the winter months. The men of Kent gave them money and presents, for which the Danes promised peace. But they broke their promise, and in the spring once more carried fire and sword amongst the Saxons

【譯】 アルフレッドの第二の兄のエセルバート が國王になつた——エセルバルド、エセルバート、エセルブレッド及びアルフレッドの四人の兄弟は皆順番に王位を承繼いだのである。 此の頃デーン人はテムズ河口のサネット島に幕舍を作り冬の間は其處に住居して居た。 ケントの人々は彼等に金や品物を與へ、デーン人はそれを貰ふ代りに平和を約した。 然し彼等は其の約を破り、春になると再びサクソン人を攻めに來た。

【註】 **to succeed to.....**「.....を繼承する」。

比較:—

(*a*) He *succeeded* his *father*.

(*b*) He *succeeded to* his father's *property*.

to のある方は財產、邦土を紹ぐの時。

to のない方は人の後を襲ぐ時。

in turn「順番に」。

to break one's promise「破約する」。

「約束を守る」は to *keep* one's promise 又は to *fulfil* one's promise.

to carry fire and sword「砲火や劍を持つて來る」とは「戰ひに來る」の意。

Ethelbred, the third son, came to the throne in 867. This year saw the arrival of a great army of Danes in East Anglia, where they remained for the winter. The East Anglians, like the men of Kent, bought peace from the enemy. The following year, this army marched into Northumbria and captured York, and the next year, having made the land north of the Humber desolate, they turned to Mercia.

【譯】 第三子のエセルブレッドが八百六十六年に王位に卽いた。 此の年にデーン人の大軍が東アングリアに到着し、冬の間此處に駐まつた。 東アングリア人も亦ケントの人々の樣に、敵から平和を購つた。 翌年此の軍はノーサンブリアに侵入し、ヨークを占領し、更に其の翌年ハンバー河以北の地を荒廢に歸せしめて彼等はメルシアに歸つた。

【註】 **to come to the throne**＝ascended the throne「帝位に來る」卽ち「帝位に卽く」。

This year saw the arrival「此の年に……の到着を見た」は「此の年に……が到着した」。 かくの如く、無生物に働きを歸する例英語には隨分多し:—

The noonday sun *saw* us on the summit of Mt. Fuji.

(正午の太陽が吾々を富士の頂上で見た＝正午に吾々は富士の頂上に達した)。 ▲ 89 頁參照。

bought peace 價を拂つて平和を得る故かく云ふ。

having made the land……desolate「……の土地を荒廢にして了つて」、「散々に荒らして」。

And now for the first time we hear of Alfred taking part in the struggle. The King of Mercia, being related by marriage to Ethelred, asked the West Saxons to help him. Ethelred gathered his men together, and taking Alfred, who was now nineteen years of age, with him, marched to Nottingham to give aid to the Mercians.

【譯】 して、此時になつて始めてアルフレッドが戰に參加したことを吾々は耳にするのである。メルシアの國王はエセルレッドと婚姻關係があるところから西サクソンに援助を求めた。 エセルレッドは士卒を集め、今は十九歳になつて居るアルフレッドを隨へ、メルシア人を扶ける爲めノッチンガムへと進軍した。

【註】 **now**＝at this time「此時」。「今」と譯すは當らず。

for the first time「初めて」。

we hear of Alfred['s] taking part in.....「吾々はアルフレッドが.....に參加したことを耳にす」

＝we hear *that* Alfred *took part in*.....

being related.....**to Ethelred**「エセルレッドと親類になつて居るので」

＝*as he was* related to Ethelred.

But the Danes had built a very strong camp, and would not come out to fight. After waiting some time in the hope that the enemy would give battle, Ethelred led his men homewards, and the Mercians bought peace from the Danes. The invaders, therefore, left Mercia and turned to the rich spoils to be obtained from the wealthy abbeys of the Fen district.

【譯】 ところがデーン人は既に堅固な陣營を築いてどうしても出て來て戰はない。 敵が挑戰するかするかと暫らく待った揚句、エセルレッドは士卒を引具して歸國し、メルシア人は價を拂つてデーン人から平和を得た。 そこで侵略軍はメルシアを去つて、フエン地方の富裕な寺院から手に入

れらるべき澤山の戰利品〔を目がけてその方面〕へ向った。

【註】 **would not come out**「どうしても出て來なかった」。 此 would に强き意志を含めり。

in the hope that.....「.....するだらうと見込んで」。

to give battle「挑戰する」。

led his men homewards「彼の部下を鄕國へと導いた」即ち「部下を引連れて歸國した」。

turned to.....「.....の方へ向つた」、漢文調の戰記に「轉じて.....に向ふ」に當る。

the rich spoils to be obtained＝the rich spoils *which could be* obtained「手に入れることの出來る澤山な分捕品」。

The payment of money to the invaders in the hope that they would go away in peace, was a favourite plan of the Saxons. It was, however, worse than useless, for whilst the Danes very rarely kept their promises, it tempted still larger bands to land, and filled them with contempt for such weak foes.

構文解說

It was (.....) worse than useless

for——worse なる理由を下に示す

whilst.....promises ——一方.....であるのに尚又と下へつながる

it { **tempted.....land**
and
filled them with.....foes

It は二ツとも *The payment of money* を指す。

【譯】 溫順しく立ち去るだらうと思って侵略軍に金を拂ふことはサクソン人の常套の策略であった。 然し此の策略は啻に無效に止まらず、有害であった。 と云ふのは、デーン人は滅多に其の約束を守らぬばかりか、その事は更に大きな團隊を誘ふて上陸せしめ、此の樣な意氣地ない敵に對する侮蔑の念を彼等の間に瀰漫せしめたからである。

【註】 **to go away in peace**「兵力に訴へず穩かに立去る」。

favourite「常に用ゆる」、「お極りの」。 參考:— *favourite* books (愛讀書)。 *a favourite* haunt (よく行くところ)を參考せよ。

worse than useless「無益ならまだいゝがそれよりも惡い」。

such weak foes はサクソン人を指す。 即ち「戰ふことを避けて金で平和を求めようとする樣な弱い敵」の意。 foes と云ふのはデーン人から見てである。

Ethelred and Alfred returned to Wessex, now the only part of the country which was not in the hands of the Danes. Their force was dismissed, and each man went to his home feeling sure that in a very short time he would be called upon to fight for life and all that was dear to him.

【譯】 エセルレッドとアルフレッドは、此時に當つてその國中に於いてデーン人の手中に陷らぬ唯一地方であるウェセックスに立ち歸つた。 其の軍勢は解散せられ、彼等は各自に、間もなく、各自の生命の爲に、又自分が愛する總てのものの爲めに戰ふべく召集せらる時があるに違ひないと思ひながら家鄉に歸った。

【註】 **in the hand of.....**=in the power of.....「.....の手中にある」。

to be dismissed「任を解かれる」或は「除隊される」。

feeling sure that.....「きつと.....だと思つて」。

to fight for life「生命の爲めに戰ふ」即ち自分等の存在を賭して戰ふ意にて若し負ければ國家も自分等も滅亡する意を示す。

to be called upon to.....「.....せよと命令される」。

all that was dear to him=all that *he loved*「彼が愛したすべてのもの」。

"How was it that the Danes made such an easy conquest of the greater part of the land?" you ask. There were many reasons, some of which you must learn.

構文解說

There were many reasons, *some of which* **you must learn**

=There were many reasons *and* you must learn *some of them.*

【譯】『此の國の大部分をデーン人がそんなに譯もなく征伏し得たと云ふのは如何いふ譯であらう』と諸君は尋ねる。 それには澤山の理由があるが、其の中の二三は諸君が覺えて置かなければならぬ。

【註】 **how was it that.....?**「.....と云ふことは如何云ふ譯であるか」。

to make a conquest of .....「.....を征服する」。

▲ 154 頁參照。

We have already said that the Saxons had given up their former warlike habits. They were settling down to be peaceable farmers, while the Danes delighted in battle.

【譯】 吾々は前に述べた。 サクソン人が彼等の以前の尙武の風習を放擲して了ったことを。 彼等は土着して平和なる農民となった、一方デーン人は戰爭を飯よりも好きであったのに。

【註】 **to delight in.....**「.....を悅びとする」、「.....を非常に好む」。

The *samurai* gloried in honest poverty. (武士は淸貧に甘んじた=武士は食はれど高楊子)。

warlike habits「武張った風俗」。

As we have seen, there was no attempt at combination. Each section of the people had to fight its own battles, and instead of attacking the Saxons as a whole nation, the Danes overcame them kingdom by kingdom.

【譯】 旣に吾々の知る如く、一致協同などは企てたこともなかつた。 民族の各團隊はそれ々々孤軍援なき戰を戰はなければならなかつた、そしてデーン人は全體としてのサクソン民族を攻擊せずして一王國づゝ征服したのであった。

【註】 **no attempt at combination**「結合に對する企てがなかつた」即ち「結合しようと企てなかつた」。

had to fight its own battles「自分は自分で單獨に戰はなければならなかつた」。

instead of……「……するかはりに；……せずに」。

the Saxons as a whole「全體としてのサクソン人」即ち「一つの團體としてのサクソン人」。

Kingdom by Kindom「一王國づゝ」。

Again, the Saxons had no standing army. Their fighting men were of two classes, the Thanes or noblemen, and the Ceorls (chŭrlz) or peasants. The former were the owners of the land, and were bound to render service to the King in time of war. They were well armed, and besides wearing coats of mail they had helmets and shields. But they fought on foot and so could not move about as quickly as the Danes, who seized the best of the plentiful supply of horses for their own use. The Ceorls, on the other hand, were without armour and carried only pikes. They were, therefore, no match for their foes whose arms were the best to be obtained at the time.

【譯】 してまた、サクソン人には常備軍といふものがなかった。其の戰士は貴族とチアール、卽ち農夫との二階級に分たれてあつた。前者は地主で一朝事ある際には國王の爲めに盡すべき義務を有って居たのである。彼等は立派な武器を持ち、

鎧の外に兜も着け楯を有って居た。それでゐて彼等は徒歩で戰った。それ故デーン人の樣に駈引自在に戰ふことができなかった、〔ナニシロ〕デーン人は此國に澤山居る馬の中でも殊に擇り拔きのものを取ってその用に供したのであるから。又チャールの方は鎧を着けず唯長鎗を携へるばかりであった。であるから、彼等は當時に於て得られる最良の武器を有して居た彼等の敵にとっては丸で對手にならなかったのである。

【註】 **again** 此處では「猶また」の意。

standing army「常備軍」。此の時代には常備軍などはなかつた。兵隊が要る時は所謂 elderman が人民から擇り出したのである。

the Danes, who……の who は *for* の意に解してよし。類例：—

You must praise the boy, *who* (= because) is so diligent.

seized the best of the plentiful supply of horses「馬の潤澤なる供給の中で最良のものを押收した」とは、譯文の如き意味を表はす。

Their fighting men were of two classes = their fighting men *consisted of* two classes「戰鬪員は二階級に分れてゐた」。

to fight on foot「徒歩で戰ふ」。

to be bound to……「……しなければならぬ」の意。

to render service to……「……に對して奉仕する」。

on the other hand＝on the contrary「之に反して」。
they were no match for……「彼等は……に取つては土臺對手にならなかつた」。

The army (it was named the Fyrd(fûrd)), such as it was, could only be called out by the Witenagemot or Council of the Nation. Then it only served for two months, at the end of which time the men were at liberty to return to their homes and attend to their private affairs, whether the campaign (kăm-pān′) was finished or not.

構文解說

The army (……) such as it was **could only be called out by……the Nation.**

＝The Witenagemot or council of the Nation alone could call out the army (……) though it was so insignificant.

【譯】 軍隊(それは **ファ〜ド**と名づけられた)その軍隊はこんな無造作なものであったのに、**ウィッテ**ナゲモット、卽ち國會でなければ召集し得なかった。召集されると唯二ケ月の間務める丈けで、二ケ月經てば其の人々は戰爭が濟まうと濟むまいとそれには關はず、勝手に歸鄉して自分の用務に從ったのである。

【註】 **the Fyrd**「帶刀御免の凡ての地主から成る軍隊」。
Wit′-en-ag-e-mot アングロサクソン時代の Council, Parliament で國王、王子、僧正、縣會其他の貴族から成つてゐた。議員は非常な權力を有して國王を選ぶ權利があった。
to be at liberty「自由になる」。
to attend to「に携はる」。
campaign「戰役」。

There were also very few fortified places in the land. The Saxons lived in open towns and villages. Even such cities as London, which had been made strong by the Romans, had been allowed to fall into dēcāy′. The walls had been broken down and the gates taken away. Indeed, the Saxons at the first did not seem to understand the advantage of fighting behind walls and other defences. It was, however, the custom of the Danes, before setting out in search of plunder, to build a strong camp, to which in case of defeat they could retire.

【譯】 また國內には要害の地がなかった。サクソン人は明け放しの町や村に住居した。羅馬

人が折角要害堅固にしといたロンドンの樣な都市ですら、むざむざ頽廢にまかせてあった。その墻壁は壞され、城門は取り除かれた。實際サクソン人は墻壁其の他の防禦物に隱れて戰ふことの利を知らなかつたらしい。ところがデーン人の方では掠奪を求めに出發する前に、先づ堅固な陣舍を築き、敗北の際に退いて之に據る樣にして置く慣ひであった。

【註】 **open towns and villages**「防禦設備のない町や村」。

to be allowed to.....「.....することを許される」が本來の意なれど此處では「.....するまゝに放任された」と譯してよし。

to fall into decay「頽敗する」。

to set out「出發する」。

in case of.....「.....に際しては；.....したらば」。

The Saxons had no fleet, and as a result, their enemies could land on any part of the coast, or, if defeated, could take to their ships and so be secure from pursuit, and free to sail to another place to make a further attack.

構文解說

The Saxons had no fleet

and as a result

their enemies
- **could land**.....**coast**
  - *or*
  - if [they were] defeated
- **could take**.....**ships**
  - *and so*
- [could] **be secure**.....**pursuit**
  - *and*
- [could be] **free to**.....**attack.**

【譯】 サクソン人には艦隊がなかつた。從って彼等の敵は海岸の何處にでも上陸することができたし、もし敗れた時は彼等の船に立ち歸って追擊の憂なからしめ、更に進んで攻擊する爲めに他の地點に向って自由に帆走ることができた。

【註】 **take to**.....「退いて.....による、避難す」。

be secure from pursuit「追擊を受けず安全である」。*from* に引き離す意あり、轉じて打消となる。

make a further attack「其上更に攻擊する」。

As there were few good roads in the Kingdom, they could kill and plunder long before a force from a distance could be brought against them.

【譯】 サクソン王國には良い道路が極めて少なかったからして、敵は悠々と殺戮や掠奪を擅にする

ことが出來た、遠隔の地から防禦軍が來着しない間に。

【註】 **they could.....them** の部分を、下の如く書き改めてもよし:—

only after they killed and plundered [to their heart's content] a force from a distance could be brought against them「彼等が散々.....した揚句にやうやく防禦軍が.....した」。

These were some of the difficulties which Alfred had to face. How he overcame them you shall hear in the next volume

構文解說

How he overcame them you shall hear.....

= *You shall hear*.....how he overcame them.

= *I will tell you*.....how he overcame them.

▲ 129 頁參照

【譯】 こゝに述べたのはアルフレッドが之に當らねばならぬ多くの困難中の二三であった。彼はそも如何にして此等の困難に打克ったか次の卷で物語らう。

【註】 **face**.....=meet.....confidently「毅然として之に當る」。

大正四年九月十日發行
大正四年九月十四日印刷

發兌 建文館
東京市神田區表神保町三番地
電話本局五三二五
振替東京八五七〇

印刷者 竹內喜太郎
東京市牛込區榎町七番地

發行者 宮邊富次郎
東京市神田區表神保町三番地

著者 鈴木秀松

著者 長谷川康

定價 金貳拾錢
郵税 金四錢

不許複製

(日清印刷株式會社印刷)

2-377

袖珍美裝

■第一編　英國古英雄譚（下卷）
■第二編　サスペンス神女王物語（全）
■第三編　北國奇談（上卷）
■第四編　アルフレッド大王（下卷）
■第五編　キリシヤ奇談（全）
■第六編　北國奇談（下卷）
■第七編　ウオーターベーピ（全）
■第八編　ポンペイの最後の日（上卷）
■第九編　英國古英雄譚（上卷）
■第十編　ポンペイの最後の日（下卷）
■第十一編　アラディンのランプ（全）
■第十二編　英國古英雄譚（下卷）

——十二冊完結——

——近刊豫告——

一冊　定價　貳拾錢　郵稅四錢

323
130

禁複写

終